ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告61

富山市内遺跡発掘調査概要XI

—北代村巻Ⅴ遺跡　友坂遺跡　吉作遺跡—

2014

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告61

富山市内遺跡発掘調査概要XI

—北代村巻Ⅴ遺跡　友坂遺跡　吉作遺跡—

2014

富山市教育委員会

例　言

1　本書は、個人住宅建築に先立つ平成25年度富山市内遺跡の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けて実施した。
3　本書で報告する調査遺跡の概要は次のとおりである。

<北代村巻Ⅴ遺跡>

遺跡所在地	富山市北代地内
発掘調査期間	平成25年7月25日～8月27日
調査面積	122㎡
整理作業期間	平成25年8月28日～平成26年3月31日
担当者	野垣好史（富山市教育委員会　埋蔵文化財センター　主任学芸員） 中野喬介（同嘱託）

<友坂遺跡>

遺跡所在地	富山市婦中町下条地内
発掘調査期間	平成25年8月8日～9月17日
調査面積	52.31㎡
整理作業期間	平成25年9月18日～平成26年3月31日
担当者	細辻嘉門（富山市教育委員会　埋蔵文化財センター　主査学芸員） 三上智丈・中野喬介（以上同嘱託）

<吉作遺跡>

遺跡所在地	富山市住吉地内
発掘調査期間	平成25年12月5日～12月27日
調査面積	65.82㎡
整理作業期間	平成26年1月6日～実施中
担当者	細辻嘉門（富山市教育委員会　埋蔵文化財センター　主査学芸員） 三上智丈・中野喬介（以上同嘱託）

4　現地発掘調査及び整理作業に際し、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（五十音順、敬称略）
　北代町内会、下条町内会、酒井英男(富山大学)、住吉町内会、富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山県埋蔵文化財センター
5　出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
6　本書の執筆・編集は、北代村巻Ⅴ遺跡を野垣、友坂遺跡を細辻・三上、吉作遺跡を細辻が行った。各々の文責は文末に記した。
7　友坂遺跡の噴砂と推定される層について、富山大学大学院理工学研究部の酒井英男教授により、地磁気年代測定ための土壌試料採取を行った。

凡　例

1　本書で用いた座標は世界測地系である。挿図の方位は真北、水平基準は海抜高である。
2　友坂遺跡及び吉作遺跡の文中、層序および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1995年版』に拠る。
3　遺構記号は、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、ピット：ＳＰ、その他の遺構：ＳＸを用いた。
4　図版中の網掛けは、次のとおりである。

地山　油煙　須恵器・珠洲の断面

目　次

Ⅰ　北代村巻Ⅴ遺跡 …… 1～25

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯 …… 1

第２節　発掘作業及び整理作業の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境 …… 2

第２節　歴史的環境 …… 2～5

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法 …… 6

第２節　層序 …… 6

第３節　遺構 …… 6～11

第４節　遺物 …… 12～16

第４章　総括 …… 17～19

引用・参考文献 …… 19

図版 …… 20～25

Ⅱ　友坂遺跡 …… 26～50

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯 …… 26

第２節　発掘作業及び整理等作業の経過 …… 26

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境 …… 28

第２節　歴史的環境 …… 28～29

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法 …… 32

第２節　層序 …… 32

第３節　遺構 …… 32～35

第４節　遺物 …… 45～46

第４章　総括 …… 49～50

引用・参考文献 …… 50

Ⅲ　吉作遺跡 …… 51～62

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯 …… 51

第２節　発掘作業及び整理等作業の経過 …… 51

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境 …… 53

第２節　歴史的環境 …… 53～54

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法 …… 57

第２節　層序 …… 57

第３節　遺構 …… 57～58

第４節　遺物 …… 58

第４章　総括 …… 58

引用・参考文献 …… 58

報告書抄録 …… 63

Ⅰ　北代村巻Ⅴ遺跡

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

北代村巻Ⅴ遺跡は、昭和 63 年度から平成３年度に富山市教育委員会（以下、富山市教委）が実施した分布調査で確認し、平成５年３月発行の『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載した。現在の埋蔵文化財包蔵地面積は 17,700 ㎡である。

平成 25 年５月 16 日、当該地において個人住宅建設にかかる埋蔵文化財の所在確認依頼書の提出があった。対象地 357.87 ㎡全域が遺跡範囲に含まれていたため、同年６月３日に富山市教委が試掘調査を実施した。平成 20 年度に東側の隣接地で本調査を実施しており、当該地にも遺跡が所在することが想定された。試掘調査の結果、全域において平安時代と鎌倉時代を中心とする遺構・遺物を確認した。試掘結果に基づき、工事主体者側と保護措置について協議を行ったが、地盤改良による遺跡の損壊が免れないことから、工事主体者の同意を得て、住宅の地盤改良を行う範囲とその周囲に入る水道管・下水管の敷設範囲、計 122 ㎡の本調査を行うこととなった。

文化財保護法 93 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、平成 25 年５月 20 日付けで富山市教委が提出を受け、平成 25 年５月 21 日付け埋文 89 号で富山県教育委員会へ副申した。

文化財保護法 99 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、富山市教委から平成 25 年７月 26 日付埋文 89 号により富山県教育委員会へ提出した。

第２節　発掘作業及び整理作業の経過

発掘作業　発掘作業は、土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が常駐して調査の監理にあたった。

着手前に住宅建設業者に地盤改良範囲を明示してもらい、本調査範囲の確認を行った。

７月 25 日から重機掘削をはじめ、排土を調査区外へ一旦搬出した。26 日に重機掘削を完了し、30 日から遺構検出作業に移った。この時点で、試掘調査で確認していた大規模な溝などを複数確認でき、ほかに土坑が数基存在することが明らかになった。遺構検出作業に合わせて遺構の配置状況を示す遺構概略図を作成した。

遺構掘削は８月２日から行った。作業効率を考え大規模な溝から掘削をはじめ、目途がたった段階で他の土坑、ピットの掘削に移った。８月８日に遺構掘削を完了した。遺構掘削と併行して平面図・断面図を作成した。測量は世界測地系座標Ⅶ系に拠り、トータルステーションを用いて行った。

お盆休みの後、清掃作業を経て８月 22 日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と各遺構の写真撮影を行った。翌日から搬出した排土の運搬と埋戻しを行い、８月 27 日に調査を完了、翌 28 日に工事主体者側に現地を引き渡した。

10 月 22 日には、対象地の北西隅部で道路からの水道管引込みに伴う工事立会を実施したが、撹乱等により遺構・遺物は確認されなかった。

整理作業　整理作業は本調査終了後から埋蔵文化財センターで実施した。遺物接合は、同一遺構内で出土したものを中心に作業を行ったが、接合可能なものはほとんどみられなかった。実測については口縁部が残るものを中心にできるだけ図化するよう努めた。遺物写真撮影は４×５判を使用し、図化したものについて行った。これらの作業と並行して原稿作成を行い、平成 26 年３月 31 日に本書を刊行し、完了した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

富山県の平野は、東は北アルプス、南は飛騨高地、西は丘陵性山地に囲まれ、そこから富山湾へ流れ下る河川が形成している。この富山平野を東西に分けるように呉羽丘陵が約７kmにわたって北に向かって突き出し、呉羽丘陵の東側は呉東、西側は呉西と呼び慣わされている。

呉羽丘陵の東斜面は急崖が多く、尾根は急傾斜で短く、谷も深い。それに対して西斜面は全体的に傾斜が緩やかで、馬背状の尾根が長く続く。特に丘陵の先端付近では標高15～20m前後の平坦な台地状地形が発達し、長岡台地と呼ばれる。大きく長い開析谷が発達し、幾筋もの開析谷によって区切られたそれぞれの台地は、広さが確保され、遺跡の立地に適している。

北代村巻Ⅴ遺跡は、呉羽丘陵北西側の台地上に立地している。周辺は現在、宅地化が進み、旧地形を把握することが難しいが、昭和２年発行の地形図（図２）をみると、幾筋もの谷が入り込み、本遺跡は谷の間に形成された台地上に立地することがわかる。遺跡のすぐ南側は谷地形の落ち込みがあり、6～7m程度の高低差がある。一方、北側は緩やかに下がり、約 300m先で台地状地形から沖積平野に移行する。縄文時代前期は海進によってここまで海岸線が及び、後述するように小竹貝塚や蜆ヶ森貝塚が形成された。本遺跡は現在の海外線から約４.５km内陸に位置する。

調査区周辺のさらに細かい地形をみると、南側は約 50m先で前述のとおり谷地形により大きく落ち込む。西側は１軒の住宅を挟んだ後、緩やかな落ち込みがあり、北側も調査区の隣の宅地が一段低い地形を呈する。したがって、遺跡は南～西～北側に比べて一段高い平坦面に所在していることになり、遺跡範囲もおおよそこれをもとに括っている。実際、北側の隣接地で行った試掘調査で遺跡は確認されなかった。これに対し、東側は緩やかに高くなりつつほぼ平坦な地形が続くことから、遺跡の所在範囲は本調査区をほぼ北西端として、東側を中心に広がっていた可能性が考えられる。

対象地は調査前は畑として利用されていたが、それ以前は建物が建っていたようで、基礎による撹乱が多くみられた。

第２節　歴史的環境

平成 26 年３月現在、富山市域では 1,048ヶ所の遺跡が確認されている。北代村巻Ⅴ遺跡を含む呉羽丘陵の周辺は約 200ヶ所の遺跡があり、約５分の１の遺跡がここに集中する。県内で最も遺跡が密集する地域で、旧石器時代から江戸時代まで連綿と人為活動の痕跡がみられる。自然地形に富むことから、遺跡の種類も集落、生産、墳墓、貝塚、山城と多様である。

旧石器時代　呉羽丘陵一帯で約 20ヶ所の旧石器時代遺跡が知られており、特に丘陵南部に多い。北代村巻Ⅴ遺跡が所在する丘陵北部は、後期のナイフ形石器や局部磨製石斧が出土している。ほとんどの遺跡でナイフ形石器や局部磨製石斧等の完成品が単独ないしは数点出土する傾向が指摘されている。季節的・一時期的なキャンプサイトとしての利用が多く、石器の集中出土例や製作痕跡がわかりにくいためと考えられる（富山市教委 1999）。

縄文時代　前期にピークを迎えた海進によって、海岸線は現在より約 4.５km内陸に入っていたことがわかっている。台地と沖積平野の境付近に小竹貝塚や蜆ヶ森貝塚が形成され、当時の海岸線の位置を知ることができる。小竹貝塚は近年の発掘調査により厚いシジミ堆積層と約 100 体もの人骨が検出されるという重要な成果があった。

中期になると、本遺跡と同じ台地上に複数の集落遺跡が展開する。このなかで最大規模であるのが北代遺跡である。早期から晩期まで営まれたが、中期中葉から後葉を主体とする。現在までに確認さ

れた竪穴建物は78棟に及び、集落中央に掘立柱建物を配して竪穴建物が取り巻く集落構造を呈する。北陸を代表する縄文遺跡として国史跡に指定され、「北代縄文広場」として整備されている。北代遺跡の北西約 300mに位置する北代加茂下Ⅲ遺跡は、やや古い中期前葉から中葉の集落である。柱列が二重にめぐる長大な掘立柱建物は、集落のシンボル的な建物と考えられている（富山市教委 2004a）。

後期から晩期は集落数・規模ともに縮小する。代表的な集落に長岡八町遺跡がある。後期後葉から晩期前葉に盛期があり、掘立柱建物のほか谷部から多量の土器・石器とともに北陸最大級の土偶頭部が出土した。御物石器、石刀、独鈷石、土笛などもあり、マツリが執り行われた拠点集落と推定されている（富山市教委 2003b）。このほかに長岡杉林遺跡で竪穴建物１棟が検出されている（富山市教委 1987）。

弥生時代・古墳時代　弥生時代中期以前の遺跡は少ないが、北代遺跡でピットから中期前半の土器の出土がある。後期・終末期に集落が急増し、古墳時代前期まで続く例が多い。特に海岸に近い平野部に集中し、四方荒屋遺跡、四方背戸割遺跡、江代割遺跡、今市遺跡、打出遺跡などが知られる。打出遺跡では、当該期としては県内最多の鉄器が出土し、神通川・常願寺川下流域における拠点的集落と評価される（富山市教委 2004b）。また、打出遺跡は状態の良い焼失住居が見つかり、住居構造を復元する良好なデータが得られた。古墳時代中期以降の集落は確認例が少ないが、呉羽丘陵北部西側の八町Ⅱ遺跡で前期前半と中期前半の集落が確認されている（富山市教委 2008）。

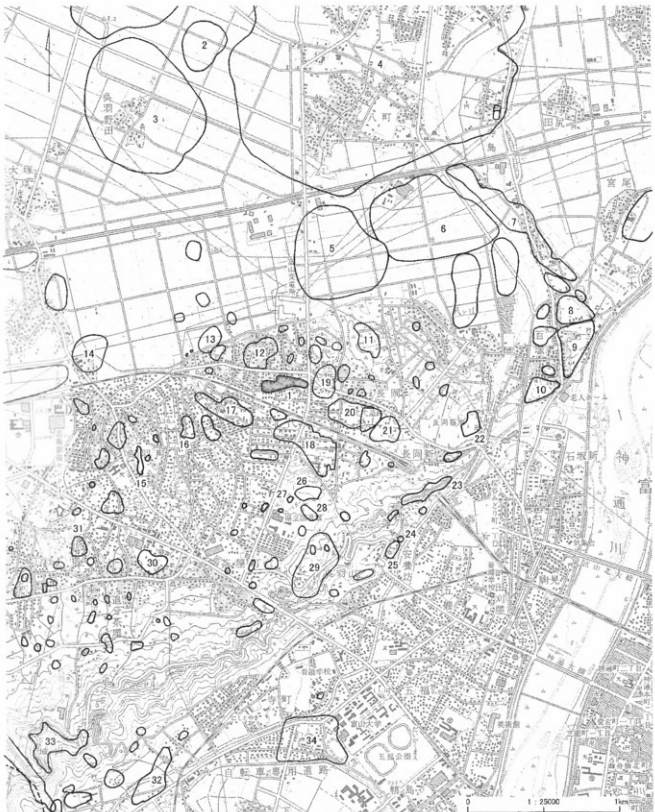
墳墓・古墳は呉羽丘陵に多数存在する。丘陵北端にある百塚住吉遺跡、百塚遺跡は、近年の調査で弥生時代後期後半から古墳時代前期前半を中心に 30 基の埋没墳墓・古墳が新たに発見され、従来の古墳分布に基づく解釈が再考されつつある（富山市教委 2012）。丘陵南部では、杉谷古墳群で四隅突出型墳丘墓を含む弥生時代終末期から古墳時代前期前半の墳墓・古墳があり、杉谷Ａ遺跡では方形周溝墓群から素環頭鉄刀、ヤリガンナ、鉄素材のほか、銅鏃やガラス小玉が発掘された。呉羽丘陵の南に連なる羽根丘陵には、弥生時代後期から古墳時代前期の集落・墳墓からなる国史跡王塚・千坊山遺跡群がある。いずれの地域も方形墓が主体を占める。中・後期は主に丘陵南部で古墳が築造される。中期は前方後円墳の古沢塚山古墳（41m）がある。呉羽山丘陵№26 号墳は、富山県内最後の後期前方後円墳と評価されている（高橋 2007）。後期古墳としては、ほかに丘陵北部に横穴式石室をもつ呉羽山古墳（円墳・消滅）があり、金銅装頭椎大刀を出土している。呉羽山古墳に近接する番神山横穴墓群は 15 基以上で構成される県内最古段階の横穴墓群である。約 4 km南西の丘陵上にはほぼ同時期の金屋陣の穴横穴墓群がある。

古　代　古墳時代に低調だった集落遺跡は、奈良・平安時代になると増加する。北代遺跡や呉羽小竹堤遺跡では鍛冶工房が、長岡杉林遺跡では瓦塔や緑釉陶器、灰釉陶器など仏教的遺物を伴う建物跡が検出された。奈良時代は、丘陵縁辺や台地に多く位置していたが、平安時代になると平野部へ広がり、耕作地などの開発が平野部へ及んだことがわかる。

集落の展開とともに生産遺跡が目立つようになる。特に呉羽丘陵南部の百駄に集中し、陶器、鉄、炭など生産品目は多岐にわたる。生産は９世紀後半にピークを迎え、10 世紀には衰退する。

中　世　北代村巻Ⅴ遺跡の北側に広がる氾濫平野の開墾が進み、荘園が形成される。この地域には「寒江荘」が置かれ、明徳 4（1393）年の「右馬頭某範氏奉書」などには京都下鴨神社領であることが記されている。八町Ⅱ遺跡では、方形にめぐる区画溝が検出され、寒江荘に関連する中核的集落との指摘がなされている（富山市教委 2008）。

海岸に近い平野部は、『廻船式目』にあげられた三津七湊のひとつ「越中岩瀬湊」との関連から、港町性格をもつ複数の集落が発掘で確認されている。四方北窪遺跡、打出遺跡、四方荒屋遺跡などが代表的な遺跡である（中世岩瀬湊調査研究グループ 2004）。



1.北代村巻Ⅴ遺跡　2.八町西Ｂ遺跡　3.呉羽野田遺跡　4.今市遺跡　5.八町Ⅱ遺跡　6.八ヶ山Ａ遺跡　7.百塚住吉Ｄ遺跡　8.百塚住吉遺跡
9.百塚遺跡　10.八ヶ山遺跡　11.長岡八町遺跡　12.極楽寺廃寺　13.蜆ヶ森貝塚　14.小竹貝塚　15.呉羽三ッ塚遺跡　16.呉羽小竹堤遺跡
17.北代中尾遺跡　18.呉羽富田町遺跡　19.北代加茂下Ⅲ遺跡　20.北代遺跡　21.長岡杉林遺跡　22.富山藩主前田家墓所　23.杉坂古墳群
24.呉羽山古墳　25.番神山横穴墓　26.茶屋町遺跡　27.北代西山遺跡　28.北代西山Ⅱ遺跡　29.茶屋町東遺跡　30.呉羽モグラ池遺跡
31.追分茶屋遺跡　32.寺町向田遺跡　33.白鳥城跡　34.大塚城跡

図１　北代村巻Ⅴ遺跡周辺の遺跡分布

一方、北代村巻Ⅴ遺跡に近い台地上では、中世の散布地が複数確認されているものの集落の様相はまだ不明な点が多い。その他、呉羽丘陵の最高峰に白鳥城が築かれる。天文 12（1543）年に築かれた富山城の詰城的な役割を担ったとみられ、発掘で礎石建物や敷石状遺構が検出された。また、白鳥城の出城として丘陵直下に大峪城が築かれた。天正 13（1585）年、富山城に拠る佐々成政を討伐するため羽柴秀吉が築いたとされている。

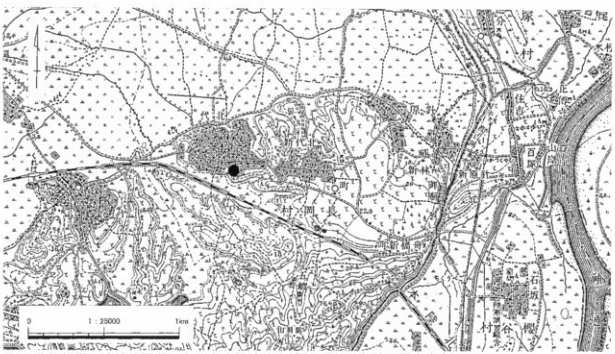


図 2　北代村巻Ⅴ遺跡位置図（大日本帝国陸地測量部 昭和 2 年地形図を改変）

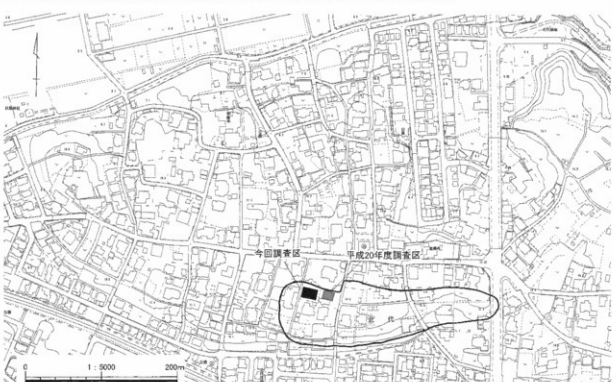


図 3　北代村巻Ⅴ遺跡調査区位置図

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査開始前に、対象地内に世界測地系第Ⅶ系に基づく座標杭を２点設置した。

表土はバックホウで遺構検出面（地山）の上面まで除去した。この際、表土中から少量の遺物が出土した。遺構の検出にあたっては、鋤簾を使用し、人力で行った。地山と遺構の識別は比較的明瞭であったが、遺構とみえたものが撹乱であったりするなど、遺構と撹乱の区別に判断を要するものがあった。遺構検出終了段階で、覆土の違いによって大きく２時期の遺構が混在することが推測された。遺構掘削は、移植ゴテ、竹ベラなどを用いて覆土を除去し、精査した。規模の大きい遺構、特徴的な様子を示す遺構については、土層観察用の畦を設定して埋没状況の把握に努めた。出土遺物は、規模が大きいＳＤ1～3は、3～4区に分けて上層・下層に分けて取り上げを行い、残りの良い遺物等は座標を記録して取り上げた。遺構番号は掘削順に１から番号を付した。遺跡名略号はＫＤＭＭ－Ｖである。

調査区内は以前にあった建物の基礎による撹乱が多くみられた。遺構に絡む撹乱は完掘したが、単独で存在するものは平面プランのみを記録し、掘削は行わなかった。

図面は、平面図・断面図ともトータルステーションで座標をおさえながら縮尺20分の１で作成した。写真は主に6×7判の白黒とカラーリバーサルを用い、35㎜判とデジタルカメラを補助的に使用した。完掘後にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

第２節　層　序（図３）

調査当時の地表面の標高は約14.8mである。

調査区東辺の中央部で土層図を作成した。Ⅰ層は表土である。Ⅱ層は褐色土で、混入による近世以前の遺物を少量含む。場所による違いはあるが、Ⅰ層はおよそ10～20㎝、Ⅱ層は20～35㎝の厚みで堆積している。Ⅲ層が黄褐色土の地山で、遺構検出面である。

地山は東部～中央付近が高く、西に向かってやや低くなる。地山面の標高は、東部の高い所で約14.4m、西部の低い所で約13.9mである。これは元の地形を反映しているとみられるが、西部は後世の改変や撹乱を被っていることも影響している。

第３節　遺　構（図３～６）

主な検出遺構は、溝４条、土坑９基である。同じ遺構面において鎌倉時代と平安時代の遺構が混在している。両時期の遺構は覆土が明確に異なり、容易に判別できる。遺構の中心となるのは、鎌倉時代の溝（ＳＤ1～3）で、調査区全体を縦横に延びている。南東部には大規模な撹乱が及んでおり、他にも大小の撹乱がみられた。

以下、主な遺構について記載する。

１　溝

ＳＤ1（図４）　調査区西端で南北方向に検出した。西側は調査区外に続く。溝として扱ったが、竪穴建物の可能性も考えられる。長さ5.90m、検出幅は最大1.05m、深さ約0.4mである。走行方向はＮ－14°－Ｅである。底面の標高は13.49～13.65mで北に向かって約15㎝低くなる。地山面も北に行くほど低くなることから、旧地形に影響されたものとみられる。東壁面に沿って４基のピットが掘られている。ＳＤ1底面からの深さは、南側から0.25m、0.35m、0.73m、0.70mである。最も北側の１基は平面規模が他より大きい。ＳＤ1の遺構検出段階でこれらのピットが確認できなかったこと、

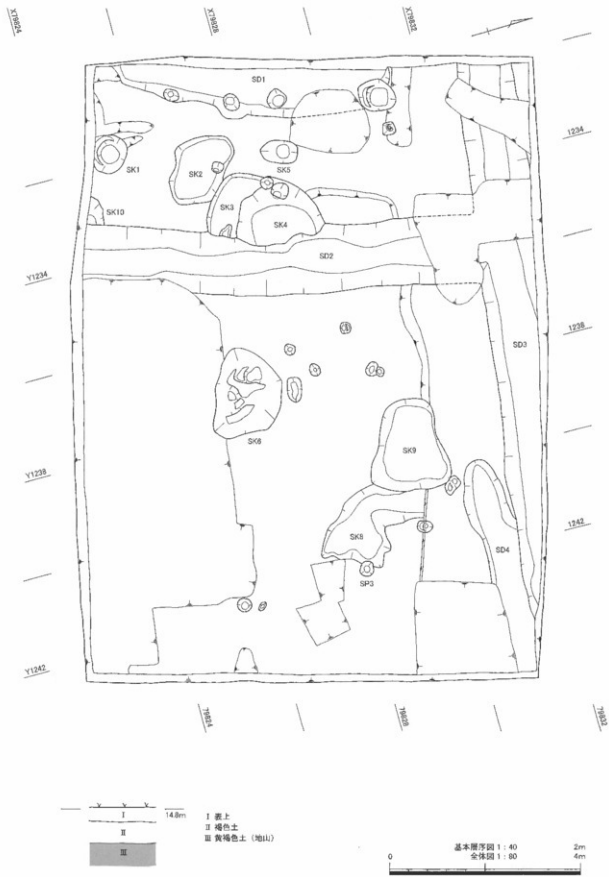


図3　調査区全体図・基本層序図

溝の壁面に沿って並ぶことからＳＤ1に伴って掘られたピットの可能性が高い。

出土遺物は、縄文土器、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、古瀬戸がある。

ＳＤ2（図4）　ＳＤ1の約3m東側で検出した南北方向の溝である。北端でＳＤ3にほぼ直角に交わる。検出長8.4m、幅約1.4m、深さ約0.7～0.8mで、走行方向はＮ－14°－Ｅである。底面の標高は13.45～13.50mで、北に向かって5㎝程度低くなる。ＳＫ3、ＳＫ4と切り合い関係にあり、土層断面の観察からＳＫ4→ＳＤ2→ＳＫ3の順に掘られたことがわかる。

出土遺物は、縄文土器、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、越前、青磁、鉄滓がある。

ＳＤ3（図6）　調査区北辺に沿って検出した東西方向の溝である。ＳＤ2にほぼ直交する。検出長11.9m、幅約1.25m、深さ約0.45～0.5mで、走行方向はＮ－97°－Ｅである。底面の標高は13.44～13.72mで、西部から中央部にかけて徐々に高くなり、東部でそこから20㎝近く急に高くなる。

出土遺物は縄文土器、須恵器、土師器、中世土師器、青磁、鉄滓がある。

ＳＤ4（図5）　調査区北東部で検出した。検出長4.6m、幅約0.9m、深さ0.1～0.2mで、走行方向はＮ－89°－Ｅである。底面は西に向かうほど深くなる。ＳＤ3と切り合い、土層断面の観察からＳＤ3の埋没後、ＳＤ4が掘られたことがわかる。

出土遺物は、縄文土器、須恵器、土師器、中世土師器がある。

小結　ＳＤ1～3は平安時代の須恵器、土師器が最も多く出土し、次いで鎌倉時代の遺物が多いという状況である。このため遺構の時期の解釈にやや戸惑ったが、溝の下層からも鎌倉時代の遺物が出土し、混入とはみられないことから、遺構の形成時期は鎌倉時代と判断した。平安時代の遺物を多く含むのは周辺あるいは上層に同時代の遺跡が存在したためであろう。

ＳＤ2とＳＤ3は規模、底面の標高がほぼ一致し、出土遺物の時期も違いがない。さらに、ＳＤ1もＳＤ2・3と軸が一致することから、ＳＤ1～3は同時期に機能した遺構とみることができる。配置状況から集落を囲む区画溝と考えられる。ＳＤ1は竪穴建物の可能性もある。

2　土　坑

9基検出した。ＳＫ7は欠番である。

ＳＫ1（図4）　調査区南西部で検出した。一部は調査区外に続く。円形を呈し、径0.8m、深さ0.5mである。出土遺物はない。

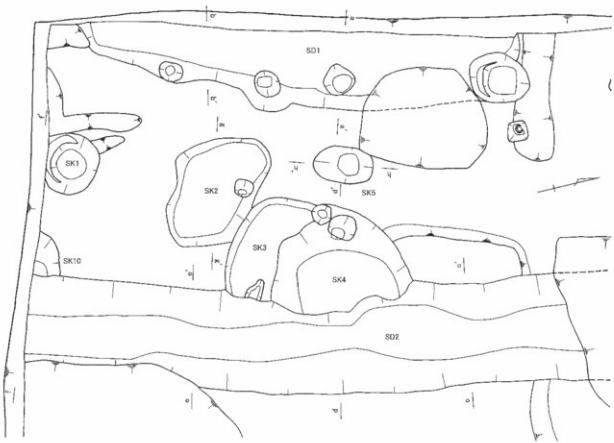
ＳＫ2（図4）　調査区南西部で検出した。不整楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸1.15m、深さ0.15mである。出土遺物は須恵器、中世土師器がある。

ＳＫ3（図4）　調査区南西部で検出した。当初はＳＫ4と同一のものとして掘削したため全体形状の把握に至らなかった。長さ1.4m以上、断面観察から深さは最深部で0.4m、南部は底面が平坦で深さ約0.15mである。ＳＫ4、ＳＤ2の埋没後に掘削された。

ＳＫ4（図4）　調査区南西部、ＳＫ3と切り合って検出した。東部はＳＤ2の掘削で失われている。径約2.5mの円形を呈すると推測され、深さは0.72mである。底面はほぼ平坦である。西の肩部付近で2基のピットが掘られている。深さはＳＫ4の底面から0.28～0.43mである。断面観察によると、ＳＫ4に伴うものか、古い時期のものとみられるが断定できない。出土遺物は縄文土器、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、越前がある。

ＳＫ5（図4）　調査区南西部で検出した。楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.3mである。出土遺物は須恵器、土師器がある。

ＳＫ6（図5）　調査区中央部で検出した。不整楕円形を呈し、長軸1.8m、短軸1.4m、深さ0.76mである。底面は凹凸が激しい。倒木痕の可能性もある。覆土は黒褐色を呈し、他の遺構と異なる。



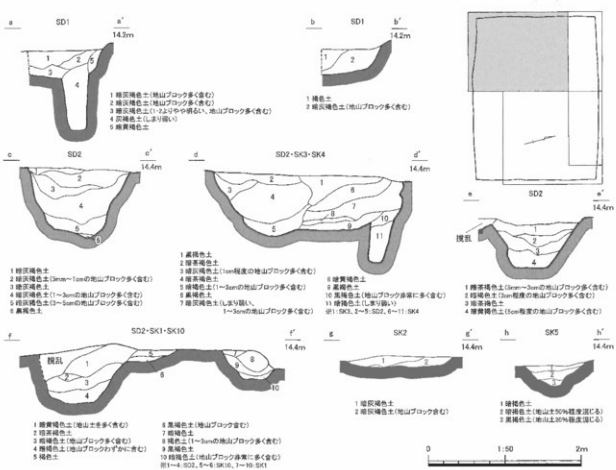


図4　検出遺構平面図・断面図（1）

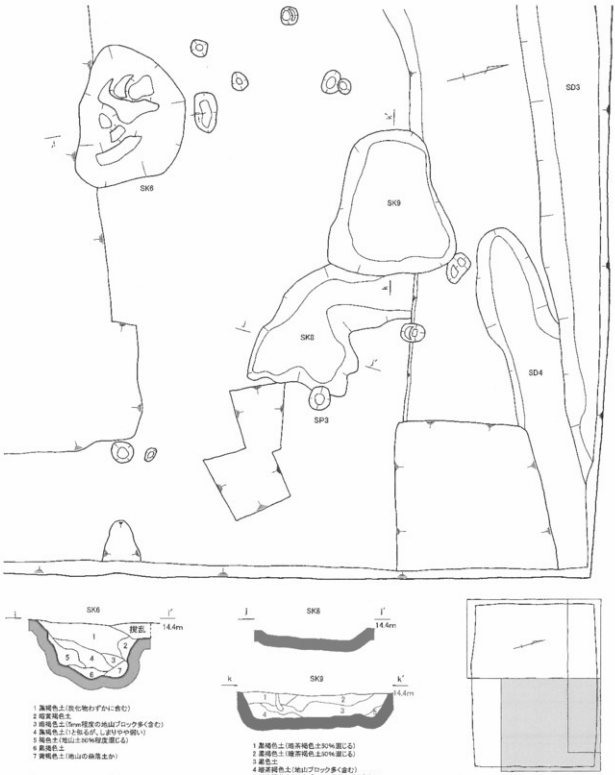


図5 検出遺構平面図・断面図（2）

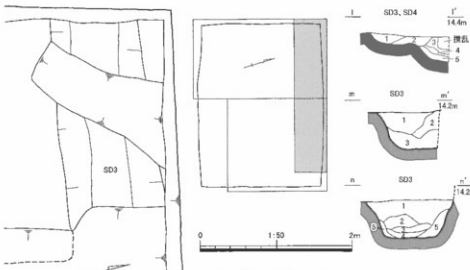


図 6　検出遺構平面図・断面図（3）

出土遺物は縄文土器を主体とし、他に須恵器、土師器がある。

ＳＫ8（図 5）　調査区東部で検出した。不整形を呈し、長軸 2.2m以上、短軸 1.35m、深さ 0.05～0.15mである。出土遺物は縄文土器、須恵器、土師器、土錘がある。

ＳＫ9（図 5）　調査区北東部で検出した。隅丸三角形状を呈し、長軸 1.95、短軸 1.67m、深さ 0.3mである。底面はほぼ平坦である。覆土はＳＫ6 と同様、黒褐色で、その他の遺構と異なる。出土遺物は縄文土器を主体とし、他に須恵器、土師器、土錘がある。

ＳＫ10（図 4）　調査区南西部で検出した。南部は調査区外にあり、東部はＳＤ2 に切られる。0.68m以上、深さ 0.15mである。出土遺物は珠洲がある。

小　結　土坑のうち、ＳＫ6 とＳＫ9 は覆土が黒褐色を呈し、褐色系を呈する他の遺構と異なるため、遺構検出段階から両者の時期は異なることが推測された。後者の褐色系覆土の遺構は、溝と同様の遺物出土状況であることから鎌倉時代であろう。黒褐色覆土のＳＫ6・ＳＫ9 は、多数の縄文土器に混じって少量の平安時代遺物が出土する。そのため縄文時代の土坑に後世の遺物が混入した可能性も考慮したが、平安時代の遺物は明らかに黒褐色覆土の中に入っていることから遺構の時期は平安時代と判断した。

3　ピット

12 基のピットを検出したが、掘立柱建物の柱穴やその他特徴的なものは認められなかった。ＳＰ3 から縄文土器が出土した。

第4節　遺　物（図7～9）

出土遺物は奈良・平安時代の須恵器・土師器が最も多く、次いで鎌倉時代の遺物が多い。ＳＫ6・9を中心に縄文時代中期の土器も定量が出土する。中世土師器の1点を除いて完形品はなく、大半が小片で残存率は5～20%程度である。

ＳＤ1　縄文時代、平安時代、鎌倉時代の遺物が混在する。1は縄文土器の深鉢である。縄文施文後、縦の沈線を入れる。2・3は須恵器の坏で、いずれも口縁部が緩やかに外反する。4～6は須恵器の坏Ｂである。高台が内端接地して外方に張り出す4とほぼ垂直になる5・6がある。7は中世土師器で、口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がる。8は古瀬戸の折縁皿とみられる。口縁部が屈曲し、端部はやや肥厚して丸い。9は珠洲の擂鉢である。器体は直線的に開いて立ち上がり、口縁端部は水平である。卸し目は、一単位幅1.8㎝で8目である。吉岡編年（吉岡1994）Ⅳ期である。

ＳＤ2　10は須恵器の坏蓋で、口縁端部は小さく摘み出して三角形状となる。天井部はつまみの痕跡がある。11は須恵器の坏Ａである。12・13は須恵器の坏Ｂである。13は高台が逆三角形状を呈し、接地面が比較的小さい。底部は回転ヘラ切りである。14は須恵器の横瓶とみられる。口縁端部が外方に三角形状に張り出す。15は須恵器の甕である。内面の当て具痕が明瞭に残る。16は土師器の甕である。端部が折り返されて玉縁状となる。17は土師器の甕あるいは鍋である。上端に面を取る。18～22は中世土師器である。18は口縁部が体部からやや角度を変えて立ち上がり、19～22は体部から緩やかに内湾しながら立ち上がって端部は尖り気味となる。底部が残るものはやや丸底である。20は完形品である。23は珠洲の甕で、外面の剥落が激しく、被熱している可能性がある。吉岡編年Ⅳ2期に比定できる。24は越前の甕である。25は瀬戸美濃の天目茶碗である。体部が屈曲しＳ字状の口縁をもつ。26は青磁である。体部中程で屈曲して口縁部が大きく外反し、口縁端部に浅い削りを波状に入れたいわゆる稜花皿である。27は鉄滓で、重さは520ｇである。

ＳＤ3　28は縄文土器の深鉢である。横方向に半截竹管文を施す。29～31は須恵器の坏蓋である。29はボタン状のつまみをもつ。30は口縁端部が丸く、31は小さく下方に折り曲げる。31は頂部にヘラ削り調整が認められる。32は須恵器の坏Ｂである。33は土師器の鍋で、肥厚した口縁端部を内側に折り曲げ丸くおさめている。34は土師器の塊で、底部は回転糸切り痕がある。35は不明土製品である。胎土は硬質である。頂部は丸みをもち、底部は円形に突出し、キノコ状の形態を呈する。36は中世土師器で、口縁端部は丸く、底部は厚みがある。口縁部全体に油煙が付着している。37は青磁塊である。蓮弁文とみられる文様が描かれている。38は鉄滓で、重さは173ｇである。

ＳＤ4　39・40は縄文土器の深鉢である。39は横方向、40は斜め方向→横方向の半截竹管文を施す。41は土師器の甕で、端部を上方に小さく引き出している。

ＳＫ2　42は須恵器の甕である。43は中世土師器で、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部のナデによってわずかに稜ができる。

ＳＫ4　44は縄文土器の深鉢である。半截竹管による半隆起線文の下に蓮華文を施す。45・46は須恵器の坏である。46は厚みをもって底部に移行していく。45・46は他の須恵器に比べて硬質で焼成が良い。47は土師器の甕で、口縁部の外端がやや突出し、端部は丸い。48は中世土師器である。口縁部は徐々に厚みを減じ、端部は尖る。49は越前の甕である。N字状口縁を呈し、端部を上方に引き出して、丁寧にナデ整形を行っている。

ＳＫ5　50は須恵器の坏蓋である。口縁部を小さく垂下させて端部は丸い。

ＳＫ6　51・52は縄文土器の深鉢である。51は半截竹管による半隆起線文を施し、口縁部に爪形文をめぐらせる。52は半隆起線文の間に斜行縄文を入れる。

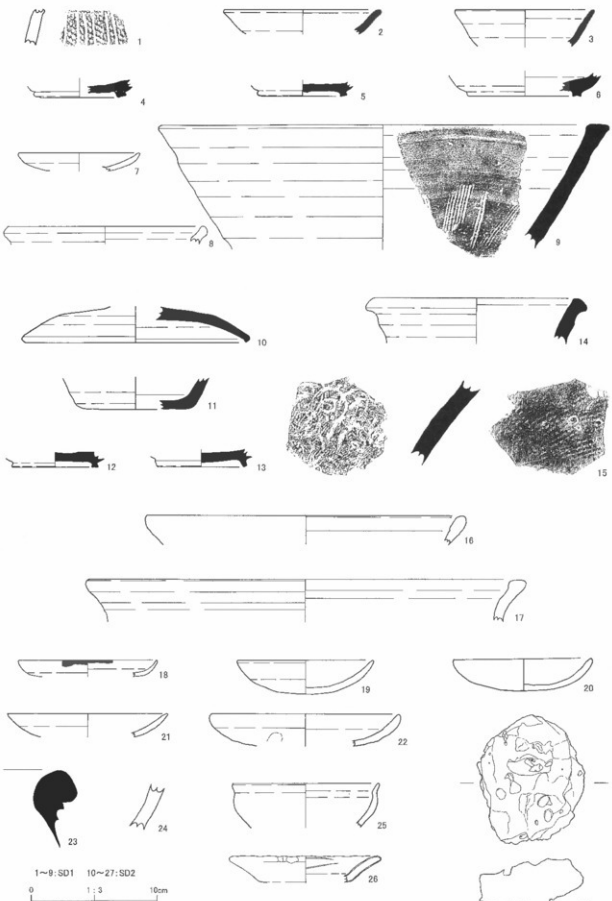
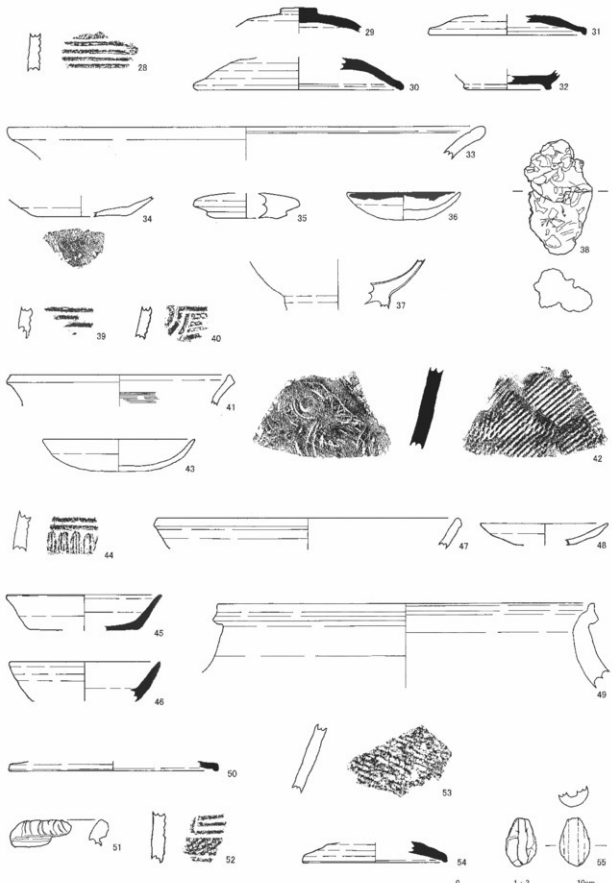

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
14
11
12
13
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
1～9：SD1　10～27：SD2
0
1：3
10cm

図 7　出土遺物（1）



28～38：SD3　39～41：SD4　42～43：SK2　44～49：SK4
50：SK5　51～52：SK6　53～55：SK8

図8 出土遺物（2）

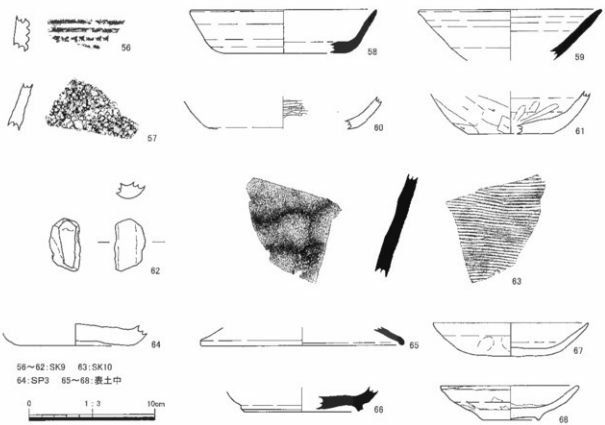


図 9 出土遺物（3）

ＳＫ8　53 は縄文土器の深鉢である。54 は須恵器の坏蓋で、口縁部は小さく垂下させて端部は丸い。体部は厚みがある。55 は土錘である。孔径 7㎜ である。

ＳＫ9　56・57 は縄文土器の深鉢である。56 は半隆起線文の一条に爪形文をめぐらせる。58 は須恵器の坏Ａである。焼成不良のためか土師質を呈する。59 は須恵器の塊とみられる。体部が直線的に立ち上がった後、口縁部がわずかに外反する。60 は内面黒色土器の塊で、外面は赤彩、内面はミガキ調整を行う。61 は土師器の甕である。外面はヘラケズリ、内面は横方向のナデの後、放射状に下から上へナデを行う。62 は土錘で、孔径は 11㎜ 以上ある。

ＳＫ10　63 は珠洲の甕である。内面の当て具痕が明瞭に残る。

ＳＰ3　64 は縄文土器の深鉢である。底部外面に輪積み痕がみえる。

表土中・地山直上　65 は須恵器の坏蓋で、口縁部を小さく折り曲げて端部を丸くおさめる。66 は須恵器の坏Ｂである。高台はシャープに整形し、内端接地する。67 は中世土師器で、口縁部はナデによって稜ができる。内面は体部を横方向にナデを行った後、見込みは一方向のナデを行う。68 は越中瀬戸の皿である。削り出し高台を持ち、体部から口縁部に灰釉を施す。

表１　出土遺物観察表

大きさの単位はcm。（　）は復元径。色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠。

番号	出土遺構	種別	器種	口径または全長	器高または最大径	底径または内径	胎土	焼成	色調 内面	色調 外面	成形・調整 内面	成形・調整 外面	備考
1	SD1	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや疎	良	にぶい黄橙10YR7/4	黄褐10YR5/6	ナデ	縄文	外面に縦方向の沈線
2	SD1	須恵器	坏	(12.4)	-	-	密	良	黄灰2.5Y6/1	灰10Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
3	SD1	須恵器	坏	(11.0)	-	-	密	やや良	浅黄2.5Y7/3	灰黄2.5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ	
4	SD1	須恵器	坏B	-	-	(7.3)	やや密	不良	浅黄2.5Y7/3	にぶい黄2.5Y6/3	回転ナデ	回転ナデ	貼付高台
5	SD1	須恵器	坏B	-	-	(7.1)	密	良	灰5Y6/1	灰5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	貼付高台
6	SD1	須恵器	坏B	-	-	(9.0)	密	やや良	灰黄2.5Y6/2	黄灰2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	貼付高台
7	SD1	中世土師器	皿	(9.6)	-	-	密	やや良	浅黄橙7.5YR8/3	浅黄橙10YR8/3	ナデ	ナデ	
8	SD1	古瀬戸	折縁皿	(15.4)	-	-	やや密	良	灰白5Y7/2	浅黄2.5Y7/3	回転ナデ	回転ナデ	胎土10YR7/3にぶい黄橙、内外面とも灰釉
9	SD1	珠洲	擂鉢	(35.4)	-	-	やや密	良	灰5Y6/1	灰7.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	単位幅1.8cm、8目の卸し目
10	SD2	須恵器	坏蓋	(17.4)	-	-	密	やや良	灰白2.5Y7/1	灰白7.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	つまみが付く
11	SD2	須恵器	坏A	-	-	(8.0)	やや密	やや不良	灰黄2.5Y7/2	浅黄2.5Y7/3	回転ナデ	回転ナデ	外面一部黒斑
12	SD2	須恵器	坏B	-		(6.8)	やや密	やや良	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ、静止ヘラ切り	貼付高台
13	SD2	須恵器	坏B	-	-	(7.2)	密	良	にぶい黄橙10YR7/2	灰白2.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ	貼付高台
14	SD2	須恵器	横瓶	(15.6)	-	-	密	良	黄灰2.5Y6/1	黄灰2.5Y4/1	回転ナデ	回転ナデ	
15	SD2	須恵器	甕	-	-	-	密	やや不良	灰白10YR8/2	灰7.5Y6/1	同心円当て具痕	格子叩き目後ナデ	
16	SD2	土師器	甕	(25.0)	-	-	密	やや良	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3	回転ナデ	回転ナデ	
17	SD2	土師器	甕or鍋	(33.8)	-	-	やや密	やや良	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3	回転ナデ	回転ナデ	
18	SD2	中世土師器	皿	(10.8)	-	-	密	良	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3	ナデ	ナデ	口縁部内外面に油煙
19	SD2	中世土師器	皿	(10.6)	2.7	-	やや密	やや良	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2	ナデ	ナデ	
20	SD2	中世土師器	皿	10.8	2.6	-	密	やや良	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2	ナデ	ナデ	
21	SD2	中世土師器	皿	(12.6)	-	-	密	良	灰黄褐10YR5/2	にぶい黄橙10YR7/3	ナデ	ナデ	
22	SD2	中世土師器	皿	(14.7)	-	-	密	良	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	ナデ	ナデ	
23	SD2	珠洲	甕	-	-	-	密	良	灰N5/2	灰N5/2	ロクロナデ	ロクロナデ	
24	SD2	越前	甕	-	-	-	密	良	にぶい橙5YR6/3	にぶい赤褐5YR5/4	ナデ	ナデ	胎土2.5Y6/2灰黄
25	SD2	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.4)	-	-	密	良	灰赤2.5YR4/2	灰赤2.5YR4/2	鉄釉施釉	鉄釉施釉	胎土2.5Y6/3にぶい黄
26	SD2	青磁	稜花皿	(11.4)	-	-	密	良	緑灰7.5GY6/1	緑灰7.5GY6/1	青磁釉施釉	青磁釉施釉	胎土2.5Y7/1灰白
27	SD2	鉄滓		10.2	8.6	-	-	-	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい褐7.5YR5/3	-	-	520g
28	SD3	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや疎	良	浅黄橙10YR8/4	にぶい黄橙10YR7/4	ナデ	半截竹管文	
29	SD3	須恵器	坏蓋	-	-	-	密	良	灰黄2.5Y6/2	灰黄2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	ボタン状つまみ
30	SD3	須恵器	坏蓋	(16.0)	-	-	密	やや良	灰オリーブ5Y6/2	灰オリーブ5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ、天井部回転ヘラケズリか	
31	SD3	須恵器	坏蓋	(12.2)	-	-	密	良	オリーブ黒5Y3/1	灰5Y4/1	回転ナデ	回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内外面一部降灰
32	SD3	須恵器	坏B	-	-	(7.0)	密	やや不良	灰黄2.5Y7/2	浅黄2.5Y7/3	回転ナデ	底部回転ヘラ切り後、回転ナデか	貼付高台
33	SD3	土師器	鍋	(37.2)	-	-	密	やや良	浅黄橙10YR8/4	にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ	回転ナデ	
34	SD3	土師器	坏	-	-	(7.0)	密	やや良	灰5Y4/1	にぶい黄橙10YR7/4	剥落	回転ナデ、底部回転糸切り	
35	SD3	不明土製品		8.4	-	4.8	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4	ナデ	ナデ	
36	SD3	中世土師器	皿	(8.7)	2.3	-	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	浅黄橙10YR8/4	ナデ	ナデ	口縁部内外面に油煙
37	SD3	青磁	碗	-	-	(8.0)	密	良	オリーブ灰10Y5/2	オリーブ灰10Y5/2	青磁釉施釉	青磁釉施釉	蓮弁文か。胎土2.5Y7/1灰白
38	SD3	鉄滓		9.1	5.3	-	-	-	明褐7.5YR5/6	明褐7.5YR5/6	-	-	173g
39	SD4	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや疎	良	にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙10YR8/4	ナデ	半截竹管文	
40	SD4	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや疎	やや良	浅黄2.5Y7/3	にぶい黄橙10YR7/4	ナデ	半截竹管文	
41	SD4	土師器	甕	(17.2)	-	-	密	やや良	浅黄橙10YR8/4	にぶい黄橙10YR7/4	カキメ	回転ナデ	
42	SK2	須恵器	甕	-	-	-	やや疎	やや不良	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	同心円当て具痕	平行叩き目後ナデ	
43	SK2	中世土師器	皿	(11.8)	2.5	-	密	やや良	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3	ナデ	ナデ	内外面黒斑
44	SK4	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや密	良	にぶい橙7.5YR6/4	橙7.5YR7/6	ナデ	半截竹管文、蓮華文	
45	SK4	須恵器	坏A	(12.3)	2.8	(8.6)	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	黄灰2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ、底部回転ヘラ切り	
46	SK4	須恵器	坏	(11.9)	-	-	密	良	灰N5/0	灰N5/0	回転ナデ	回転ナデ	
47	SK4	土師器	甕	(23.6)	-	-	密	やや良	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3	回転ナデ	回転ナデ	
48	SK4	中世土師器	皿	(9.9)	-	-	密	やや良	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	ナデ	ナデ	外面黒斑
49	SK4	越前	甕	(29.5)	-	-	密	良	にぶい橙5YR6/4	にぶい褐5YR5/4	回転ナデ	回転ナデ	内外面自然釉。胎土10YR6/1褐灰
50	SK5	須恵器	坏蓋	(16.4)	-	-	密	不良	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2	回転ナデ	回転ナデ	
51	SK6	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや疎	やや良	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄褐10YR5/4	ナデ	半截竹管文、爪形文	
52	SK6	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや疎	やや良	灰黄褐10YR5/2	浅黄橙10YR8/4	ナデ	半截竹管文、縄文	
53	SK8	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや疎	やや良	浅黄橙10YR8/4	にぶい黄橙10YR7/4	ナデ	縄文	
54	SK8	須恵器	坏蓋	(11.0)	-	-	密	良	黄灰2.5Y6/1	黄灰2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	外面一部降灰
55	SK8	土錘		3.8	2.4	0.7	やや密	やや良	淡黄2.5Y8/3	黄褐2.5Y5/3	-	ナデ	
56	SK9	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや密	やや良	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙7.5YR8/4	ナデ	半截竹管文、爪形文	
57	SK9	縄文土器	深鉢	-	-	-	やや疎	やや良	明黄褐10YR7/6	にぶい黄橙10YR7/4	ナデ	縄文	
58	SK9	須恵器	坏	(14.6)	3.4	(10.0)	やや密	不良	淡黄2.5Y8/3	淡黄2.5Y8/3	回転ナデ	回転ナデ	
59	SK9	須恵器	椀	(14.2)	-	-	密	良	黄灰2.5Y6/1	灰5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
60	SK9	土師器	内面黒色椀	-	-	(11.0)	やや密	良	黒5Y2/1	明褐7.5YR5/8	ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	外面赤彩
61	SK9	土師器	甕	-	-	(6.8)	密	やや良	灰白2.5Y8/1	浅黄橙10YR8/4	ナデ	ヘラケズリ	
62	SK9	土錘		-	-	-	やや密	やや不良	淡黄2.5Y8/3	灰白10YR8/2	-	ナデ	
63	SK10	珠洲	甕	-	-	-	密	良	灰N5/0	灰N5/0	当て具痕	平行叩き目	
64	SP3	縄文土器	深鉢	-	-	(9.0)	やや疎	やや不良	浅黄2.5Y7/3	にぶい黄橙10YR7/4	ナデ	ナデ	底部外面に輪積み痕
65	表土中	須恵器	坏蓋	(15.7)	-	-	密	良	灰5Y5/1	灰5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
66	表土中	須恵器	坏B	-	-	(9.0)	密	良	黄灰2.5Y5/1	灰黄褐10YR4/2	回転ナデ	底部回転ヘラ切り後、回転ナデ	貼付高台
67	表土中	中世土師器	皿	(12.2)	2.6	-	密	やや良	淡黄2.5Y8/4	灰白2.5Y8/2	ナデ	ナデ	
68	地山直上	越中瀬戸	皿	(10.8)	2.7	4.5	やや密	良	にぶい橙7.5YR7/3	橙5YR6/8	回転ナデ	回転ナデ	削り出し高台。口縁部灰釉5Y8/2灰白

第4章　総　括

検出した遺構は鎌倉時代を主体とし、平安時代のものが少し混在する。遺物の出土状況をみると、鎌倉時代の遺構に平安時代の遺物が、平安時代の遺構に縄文時代の遺物が多数混入する状況が認められる。遺物量からは、たまたま混入したという程度ではなく、当該地ないしはすぐ近くに縄文時代・平安時代の集落が存在したことが想定できる。以下でみるように縄文時代と奈良・平安時代の集落は立地が共通性しており、前時代の集落を削平して新たな集落を造成するという行為を行った結果とみられる。平成20年度に東側の隣接地で行った発掘調査成果を含めて、遺跡の時期と性格を検討したい。

第1節　縄文時代の集落

縄文時代は、中期前葉の新崎式土器が多く出土し、集落の存在が推定される。周辺の同じ台地上には、本遺跡の南東約 500mに国史跡北代遺跡がある。早期から晩期まで集落が営まれるが、中期後葉にピークを迎える大規模集落である。また、北代遺跡の北西に北代加茂下Ⅲ遺跡があり、中期前葉から中葉の集落が検出されているが、主体となるのは中期中葉である。（富山市教委 2004a）。

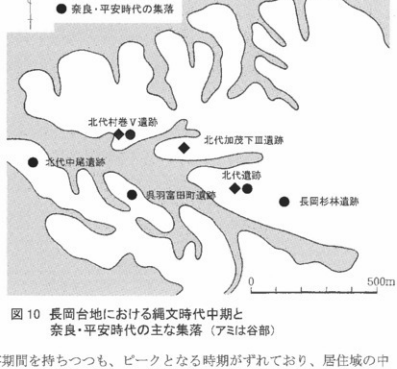


図10　長岡台地における縄文時代中期と奈良・平安時代の主な集落（アミは谷部）

この2つの遺跡と本遺跡の立地を図10に示した。3遺跡とも谷が入り組む台地尾根の先端付近に位置し、中期集落の立地状況の共通性がみられる。また、3遺跡は共存期間を持ちつつも、ピークとなる時期がずれており、居住域の中心が徐々に東に移っていく様子が読み取れる。

第2節　平安時代の集落

土坑2基（ＳＫ6・ＳＫ9）がある。また、鎌倉時代の溝の中からは当該期の遺物が多数出土した。出土遺物は土師器・須恵器を中心とし、ほかに土錘がある。鉄滓についても、周辺の奈良・平安時代遺跡で製鉄関連遺構が複数見つかっていることから平安時代のものとみる。平成20年度調査区では羽口も出土している。検出遺構は少ないが、製鉄を行う集落が存在した可能性が考えられる。時期は 8世紀後葉から9世紀前葉を中心とする。

本遺跡の南に広がる開析谷対岸の台地には呉羽富田町遺跡がある（図10）。発掘調査で4棟の竪穴建物が検出され、8世紀末～9世紀初頭とみられている（富山市教委 1978）。北代村巻Ⅴ遺跡とほぼ同時期で、近接した位置関係にあり、土器、土錘、鉄滓と同じ組成の出土遺物があることから同じ性格の集落とみられる。

両遺跡の間の開析谷を囲むように、ほかに北代遺跡、長岡杉林遺跡、北代中尾遺跡、茶屋町遺跡などの奈良・平安時代集落が点在する。縄文時代中期の集落と同様に台地の尾根に立地する傾向がある。

北代遺跡、茶屋町遺跡では製鉄炉が検出されたほか、長岡杉林遺跡は耕地の開発を進めた開墾集落と評価され、そのために鉄を要したことが指摘されていなり、規模の大小はあるにしても遺跡ごとに鍛冶等を行っていたと考えられる。いずれの遺跡でも同じような遺物組成がみられ、複数の開墾集落が併存した状況が見て取れる。北代村巻Ⅴ遺跡もそうした沖積平野の開発を進めた集落の一つと考えられる。

第3節　鎌倉時代の集落

本調査区の主体となる時期で、区画溝を伴う集落と考えられる。時期は、13世紀後半から14世紀前半である。

図11に平成20年度調査区と今回調査区を合わせて区画溝を復元的に示した。平成20年度調査区では、2条の南北にはしる幅約2m、深さ0.8～1.2mの溝（SD11・SD12）を検出した（蓮沼・宮崎2009）。両調査区の成果から、SD11・12と今年度調査区SD2の間に東西約22mの区画を形成していたことが推定できる。ただし、SD11・12が幅約2mあり、かつ2条一対のような状況であるのに対し、SD2は幅約1.4mしかないことを考えると、SD11・12が大区画溝、SD2は大区画の中を細分する溝の可能性がある。SD3が西側の調査区外へ続くことから、SD11・12の対となる大区画溝はさらに西側に存在する可能性がある。

北側は、次の理由によりSD3付近が集落の北端を示すと考えられる。まず、平成20年度調査区のSD12が北端で急に深さを減じて溝の終わりのような状況をみせること、さらに両調査区の北側は一段低くなり、これが旧地形を反映していた可能性があるためである。実際、この一段低い宅地で行った試掘調査では遺跡は見つからなかった。このことから、SD3が集落の北端を示すとみられるが、SD3の規模は幅1.25mで、上で大区画溝とみたSD11・12より大幅に狭い。このことからSD3のすぐ北側に2条一対となるような別の溝がもう一条存在した可能性がある。

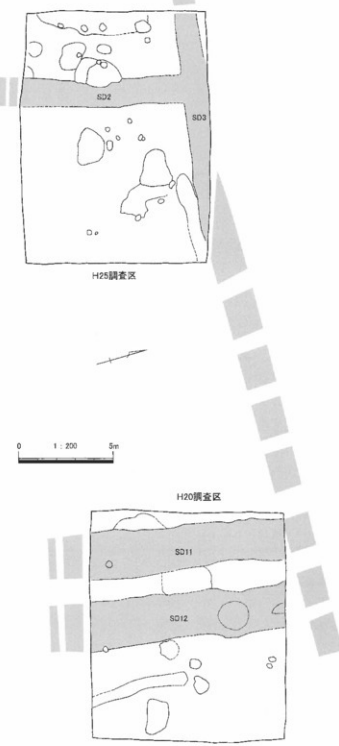


図11　区画溝復元図

また、SD11・12の東側にも別の区画があった可能性が高い。東側に向かって地形が緩やかに高くなることを考慮すると、集落の中心は調査区の東側と南側にあったとみるべきであろう。

区画溝で注目されるのは、走行方向がおおよそ正方位を向くことである。計画的な集落形成が行われたことが見て取れる。柱穴等の建物跡が検出されなかったのは、削平が及んだためかもしれない。同じ鎌倉時代の遺構でも切り合いがあることから複数の時期に細分できる可能性がある。

本遺跡の北東約800mの沖積平野には、同様の区画溝をもつ八町Ⅱ遺跡がある（富山市教委 2008）。中世は、鎌倉時代の13世紀後半～14世紀前半と室町・戦国時代の15～16世紀前半の2時期の集落が確認されている。鎌倉時代には溝による方形区画をもつ集落が形成されたが、室町・戦国時代はこれが不明瞭になるとされる。ここでは本遺跡と同時期の鎌倉期の集落と比較する。

八町Ⅱ遺跡の鎌倉時代の集落は、建物や溝の主軸から3期に細分される。区画溝は1m前後の溝が方形区画をつくり、その外側をめぐる2m以上の溝が集落の端を示すと考えられている。注目されるのは、本遺跡と溝の規模がほぼ一致するだけでなく、集落の端を区画する幅2m前後の溝が、2条一対で掘られている点も共通することである。主軸がほぼ東西南北を指向していることも似る。両遺跡の近さ、時期と集落構造の共通性を考慮すると、何らかの関係があったことは間違いないだろう。規模からみると、平野部に立地する八町Ⅱ遺跡の方が大きいことが推測でき、北代村巻Ⅴ遺跡は同じ集団による付属的な集落であったかもしれない。

奈良・平安時代は主に台地上に集落が展開し耕地の開発を進めた。その過程でやがて中世には平野部にも進出し、八町Ⅱ遺跡のような区画溝をもつ集落が形成されたと考えられる。付近一帯は、古代の「寒江郷」や中世の「寒江荘」が置かれた地域とされている（高瀬監修 1994）。安直な対比は避けたいが、これまでの発掘調査から明らかになった集落の動向は、本地域が古代から中世にかけて重要な位置を占めていたことを示している。（野垣）

引用・参考文献

高瀬重雄監修 1994『富山県の地名』日本歴史地名大系16　平凡社

高橋浩二 2007『富山の古墳－氷見・雨晴の首長と日本海－』富山県・日本海学推進機構

田嶋明人 1988「古代編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

中世岩瀬湊調査研究グループ 2004「「海中から中世岩瀬湊を探る」15年度海底探査報告」『富山市日本海文化研究所報』第33号　富山市日本海文化研究所

富山市教育委員会 1978『富山市呉羽富田町遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 1980『今市遺跡・北代遺跡』

富山市教育委員会 1987『長岡杉林遺跡』

富山市教育委員会 1999『史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書』

富山市教育委員会 2003 a『北代西山Ⅱ遺跡・茶屋町遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2003 b『長岡八町遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2004 a『北代加茂下Ⅲ遺跡発掘調査報告書』

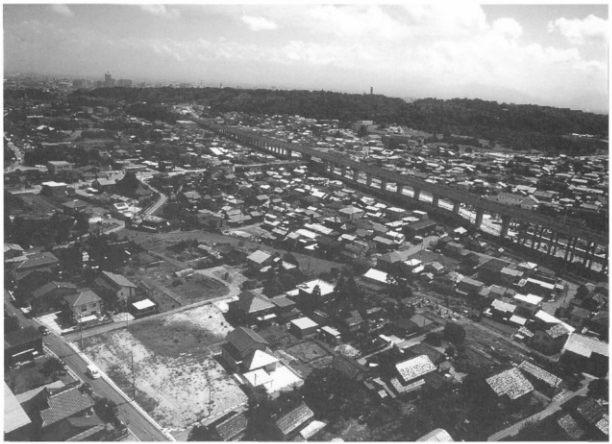
富山市教育委員会 2004 b『打出遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2008『八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2012『百塚遺跡発掘調査報告書』

蓮沼優介・宮崎琢也 2009「北代村巻Ⅴ遺跡」『富山市の遺跡物語』№10　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



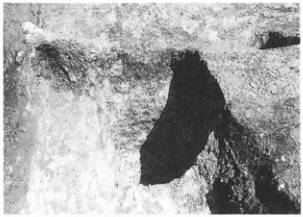
調査区上空から呉羽丘陵を望む（北西から）

調査区全景（北東から）

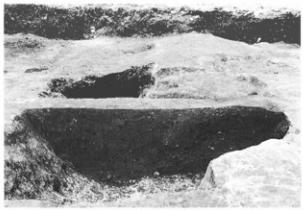
調査区全景（北西から）

SD1・2 完掘（北から）

SD1断面（南から）


SD1内ピット完掘（南から）

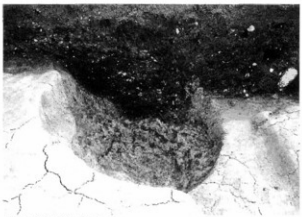
SD2・SK10断面（北から）


SD2・SK3・SK4断面（北から）

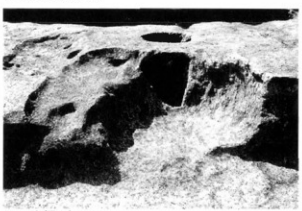
SD3完掘（西から）

SD3断面（東から）

SD3・SD4断面（東から）

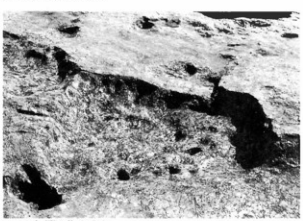

SK1完掘（北から）

SK2・3完掘（西から）


SK4完掘（東から）

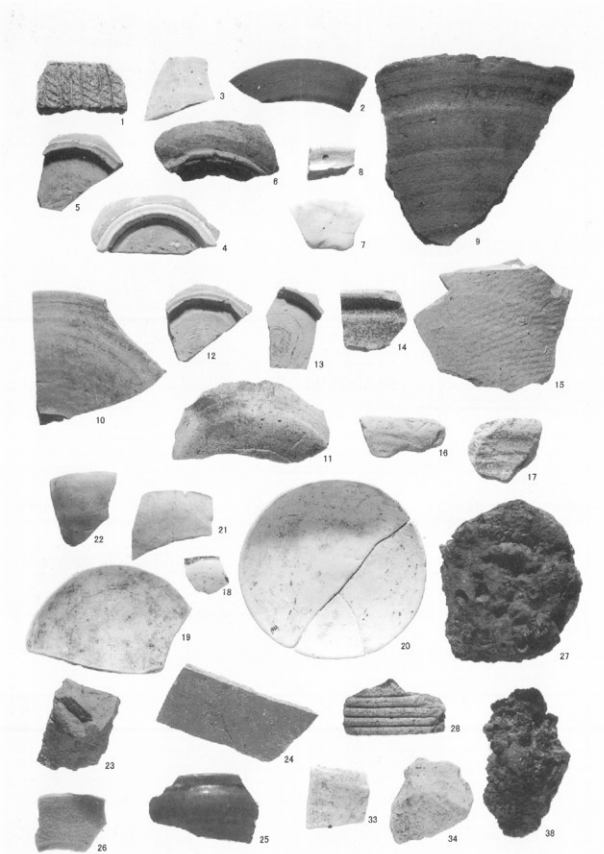
SK5完掘（北から）

SK6完掘（東から）

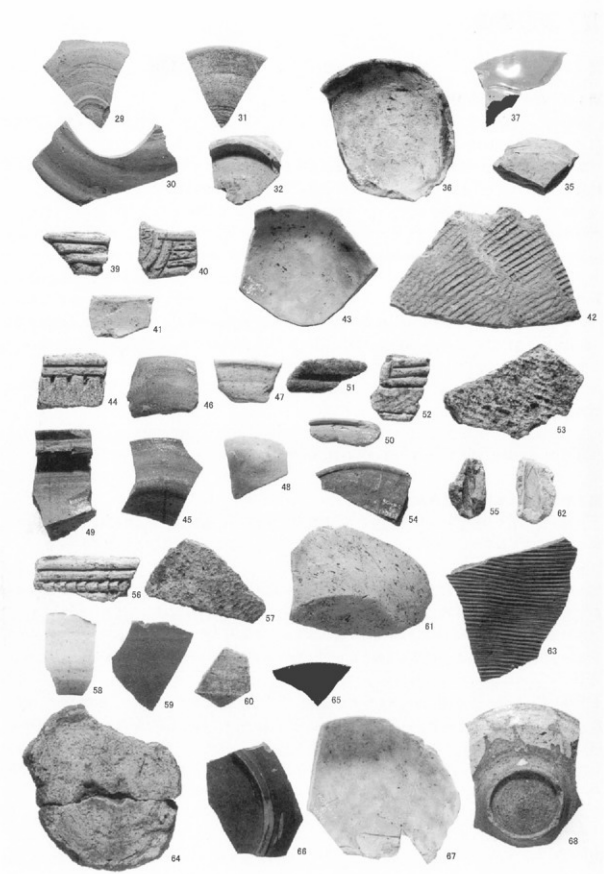

SK9完掘（北から）

SK8・9完掘（東から）

基本層序（西から）


1
3
2
9
5
6
8
4
7
10
12
13
14
15
11
16
17
22
21
18
19
20
27
23
24
28
26
25
33
34
38

出土遺物（1）


29
31
37
30
32
36
35
39
40
43
42
41
44
46
47
51
52
53
50
49
45
48
54
55
62
56
57
61
63
58
59
60
65
64
66
67
68

出土遺物（2）

Ⅱ　友坂遺跡

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

友坂遺跡（遺跡番号 2010429）は、昭和 49 年（1974）刊行の文化庁文化財保護部監修『全国遺跡地図 16 富山県』には既に登載されており、古くから知られた遺跡である。

遺跡内では以前から各種開発に先立つ試掘調査及び発掘調査が行われており、これまでに３回、遺跡範囲の見直しが行われ、現在の埋蔵文化財包蔵地面積は 624,800 ㎡である。

平成 24 年 10 月 27 日、富山市婦中町下条地内において、個人住宅建設について埋蔵文化財包蔵地の所在確認依頼があった。建設予定地全域 262 ㎡が友坂遺跡に含まれていたため、平成 25 年４月 16 日に富山市教委（以下市教委）で試掘調査を実施したところ、戦国時代の遺物包含層と土坑・溝・ピットを上下二層検出し、須恵器・珠洲・中世土師器・土錘などが出土した。建設予定地全域に埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、工事主体者と建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。協議の結果、擁壁設置工事の計画が遺構検出面よりも深く、埋蔵文化財を現地で保存することができないため、擁壁部分 52.31 ㎡について発掘調査を行い、記録保存することとなった。

文化財保護法 93 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、工事主体者から平成 25 年４月２日付けで富山市教委へ提出され、富山市教委の副申を付けて平成 25 年４月４日付け 24 埋文第 284 号で富山県教育委員会へ提出した。

文化財保護法 99 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、富山市教委から平成 25 年８月 14 日付け 24 埋文第 284 号により富山県教育委員会へ提出した。

第２節　発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が現地に常駐して調査の監理にあたった。調査着手前にハウスメーカー立会いの下、調査が必要な範囲について確認を行った。

発掘調査は平成 25 年８月８日から同年９月 17 日まで行った。表土掘削はバックホウを用いて平成 25 年８月８日に行った。排土は調査区外の敷地内に横置きした。引き続き表土除去完了後の８月９日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を開始した。

試掘調査結果では、戦国時代の遺物包含層と遺構面が調査区一部で二層堆積することが想定されており、掘削を開始すると、調査区西側一部分で上層の遺構が確認された。上層の掘削作業完了後、８月 26 日に高所作業車による上層の全景写真を撮影した。上層調査完了後、引き続き下層包含層の掘削を開始した。遺物は、任意に 5mグリッドを設定してグリッド毎に取り上げた。包含層掘削が完了したところから遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を行った。掘削作業と並行して随時写真撮影・測量・図面作成作業を行った。９月 12 日には遺構掘削を終え、高所作業車を使用して全景写真を撮影した。９月 12 日午後には富山大学理学部酒井英男教授により、噴砂と推定される層の地磁気年代測定のための土壌試料採取が行われた。９月 13 日から現地埋め戻しを開始した。９月 17 日埋め戻し作業完了を確認し現地調査を完了した。

遺物整理・報告書作成作業は、現地調査終了後、埋蔵文化財センターで実施した。遺物接合作業は、遺構毎や 5mグリッド内の他、グリッドと対応する遺構と包含層でも行った。遺構出土遺物でも口縁部が残るものを優先して図化した。遺物写真はデジタルカメラを使用し、図化したものを撮影した。これらの作業と並行して原稿作成を行い、平成 26 年３月 31 日に本書を刊行し、完了した。

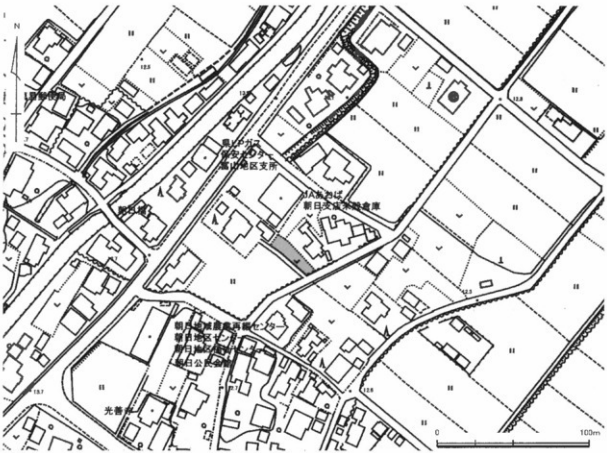


図12 調査区位置図(S＝1/2500)

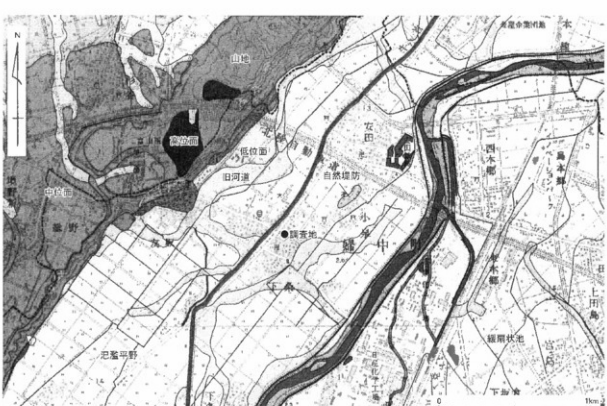


図13 遺跡周辺の地質(S＝1/25000)国土地理院2007に加筆

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置する。富山市の地勢は大まかに山間部と平野部に大別され、南が高く、北が低くなるという地勢を示しており、海岸から標高3,000m級の高山地帯まで変化に富む。

富山平野は富山県中央部の大部分を占めており、北は富山湾と面し、東端は早月川扇状地、西端は県のほぼ中央を二分する呉羽丘陵に、南は飛騨山地から続く丘陵に接する。神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地や低位面・氾濫平野の発達が顕著である。

友坂遺跡（図14・1）は、富山市中心部から直線距離で南西約6㎞の富山市西部、富山市婦中町友坂・下条・安田・小泉地内の東西1,500m、南北700mに広がる縄文、奈良・平安、鎌倉・室町、近世にわたる集落・城館遺跡である。

今回調査区の所在する婦中町下条地区は、富山湾から9.5㎞内陸に入った、井田川の堆積によって形成された低位面、自然堤防、氾濫平野上に立地する（図13）。現在の地形はほ場整備などによりほぼ平坦であるが、過去には井田川とその支流が幾度となく流れを変え、旧河道がいくつか確認される。

井田川は、富山県・岐阜県境に源を発する渓谷が断崖山地を開析し富山市八尾町付近で合流して、山麓山腹に段丘平野や扇状地を形成しながら北流する。井田川中流域には「島」という字がつく地名が多く見られるが、これは、平野を網の目のように流れる河川の間に点在する集落が、あたかも島のように浮かんで見えるためという説がある。下条地区周辺の井田川は、現在は地区の東方0.5㎞を北東に流れているが、航空写真や旧地図によると、かつては地区の西側、呉羽丘陵沿いを蛇行しながら北東に流れていたことが確認できる。

調査区の西側には主要地方道富山庄川線が北東～南西に貫いている。地区の北1.0㎞には主要地方道富山小杉線が東西に走り、幹線道路として物流の中心を担っている。地区の北西0.9㎞には富山大学医学部付属病院があり、中核病院として地域医療を担っている。富山庄川線の両側には家々が建ち並び、地区の中心を形成している。地区の東側一帯は水田が大部分を占めており、米軍が1952年に撮影した航空写真（図版7）を見ても、現在の様相とほとんど変わりがない。土地利用は昔から低位面や自然堤防上に居住地、氾濫平野に耕作地という構成から変化が少ないと考えられる。

周辺の遺跡も、度重なる河川の氾濫を避けるように、微高地や自然堤防上に点在するという立地の傾向を示す。今回の調査地は婦中町下条地区の中央、遺跡の南端に位置する。調査前の現況は畑地である。調査区付近の標高は約13mで、ほぼ平坦である。

第2節　歴史的環境（図14）

友坂遺跡を中心として、周辺の遺跡について概観する。

本遺跡では、昭和56・57年、平成4年に、今回調査区の北0.3㎞にある朝日小学校改築に伴い発掘調査が実施され、古代の竪穴建物や中世の区画溝、掘立柱建物などが検出され、土師器・須恵器・土錘、珠洲・中世土師器、近世陶磁器などが出土した。方形の区画溝が二重に巡る中世の居館跡と理解される。また、個人住宅に先立つ発掘調査では、縄文、奈良・平安、鎌倉・室町時代の遺構、遺物を確認した〔婦中町教委 1984・1993・1997〕。

周辺の遺跡に目をひろげると、旧石器時代から縄文時代の遺跡は、呉羽丘陵上の中位面や山地が分布の中心であり、本遺跡近辺では氾濫平野であり遺跡は分布しない。

旧石器時代の遺跡としては、境野新遺跡(2)では、東山系石刃技法の技法で作られたナイフ型石器が出土した。向野池遺跡では、瀬戸内系横長剥片剥離技法による剥片が出土した〔富山市教委 2000〕。

このほか杉谷H遺跡、古沢遺跡(3)、古沢A遺跡(4)、平岡遺跡、千坊山遺跡などで遺物が確認された。

縄文時代に入ると、古沢遺跡では、縄文時代前期の貯蔵穴を検出した〔富山市教委 1977〕。本遺跡の南西 2.0 kmにある平岡遺跡では前期の集落を検出した。開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡では、縄文時代中期の集落を検出した。射水丘陵東端の丘陵上に営まれた中核的集落を発掘調査し、竪穴建物 75 棟、大型の掘立柱建物を確認し、コハクが出土した。開ヶ丘中山Ⅰ遺跡では、縄文時代後期後半の竪穴建物 3 棟、縄文時代晩期後葉の竪穴建物 4 棟を検出した。二本榎遺跡では縄文時代後期の遺物が表採された。西側丘陵上にある杉谷 64 番遺跡・杉谷 81 番遺跡(5)では、晩期の遺構・遺物が確認された。古沢A遺跡では晩期の巨大柱穴を検出し、竪穴状遺構から大洞A式期併行の特徴をもつ土器が出土した〔富山市教委 1983〕。野下・新開遺跡でも晩期の遺構・遺物を確認した。

弥生時代に入ると、前期から中期にかけて市内全体で遺跡が低調であることと同様に、この地域でも遺物が散発的に出土する程度である。後期初頭に入ると、向野池遺跡では竪穴建物を検出し、東北地方に多く分布する天王山系の土器が出土した〔富山市教委 2006〕。後期後半には、白鳥城(6)で高地性集落を検出した〔富山市教委 1983〕。弥生時代終末期になると遺跡数が増加する。本遺跡の 0.8km西北西の丘陵上には杉谷A遺跡(7)で方形周溝墓群などを検出した〔富山文化研究会 1975〕。

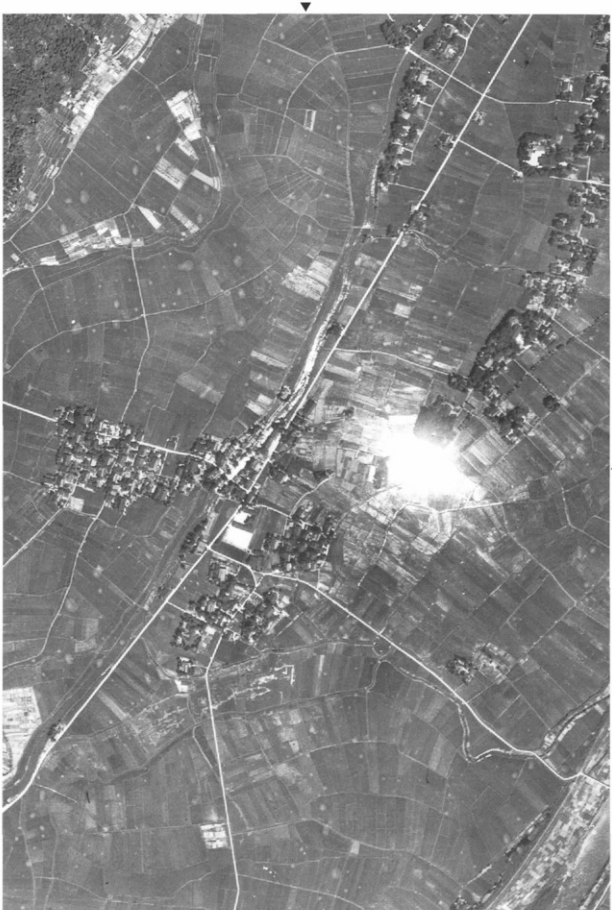
続く古墳時代前期には四隅突出墳の杉谷 4 号墳を含む杉谷古墳群(8)が築かれた〔富山市教委 1974〕。また、南西 3.5km には国史跡王塚・千坊山遺跡群がある。弥生時代終末～古墳時代初めにかけての集落・四隅突出型墳丘墓や前方後方墳からなる遺跡群で、他地域との交流や、弥生時代から古墳時代にかけて地域社会がまとまっていく過程を知ることができる北陸の代表的事例とされる。古墳時代中期には、境野新遺跡・東老田Ⅰ遺跡などに集落が営まれ、呉羽丘陵上に前方後円墳の古沢塚山古墳が築かれた。古墳時代後期には、平野に面した崖面に金屋隠ノ穴横穴墓(9)が作られた〔富山市教委 1976〕。南西 3.0km にある二本榎遺跡では、7 世紀初めの片袖式横穴式石室を持つ円墳 1 基を確認した。王塚・千坊山遺跡群の後の時代の地域のリーダーの家族墓とされる〔富山市教委 2012〕。

続く古代になると呉羽丘陵西麓から射水丘陵東部にかけては、飛鳥・奈良・平安時代の越中における手工業生産（製陶・製鉄・製炭）の中心地帯となり、遺跡の周囲には生産遺跡が集中する。本遺跡の北 2.5km には飛鳥時代に操業された県史跡の金草第一古窯跡(10)がある〔富山市教委 1970〕。奈良時代には古沢・西金屋窯跡群(11)が操業された。西金屋窯跡では市道改良工事の際に須恵器窯跡を検出し、四脚をもつ円面硯が 2 個体出土した〔富山市教委 2000〕。

本遺跡南西 2.5 kmには市史跡の栃谷南遺跡(12)がある。8 世紀に操業した瓦陶兼業窯で、須恵器・土師器・製鉄関連の遺物のほか 200 点以上の軒丸瓦が出土した。古代越中における窯業生産の歴史や仏教文化の浸透の様相を解明する上で重要な遺跡である〔富山市教育委員会 2002〕。向野池遺跡では、廂の付く大型の掘立柱建物が検出され、生産遺跡を管理する公的建物であると推定される〔富山市教委 2006〕。仏教関連の遺物では、向野池遺跡や開ヶ丘中遺跡で瓦塔が出土した〔富山市教委 2002・2003〕。花ノ木C遺跡(13)では、奈良時代の溝から人形・斎串が出土し、律令祭祀が行われていた〔堀沢 2004〕。

中世～近世の遺跡には、本遺跡の北西 0.8km の井田川西岸に国史跡安田城跡(14)がある。安田城跡は、豊臣秀吉が佐々成政を攻める際に、前田利家が築き、家臣岡島一吉が拠ったとされる。発掘調査では堀・土塁などを検出し、古絵図と同じ縄張りが確認された。貴重な戦国期平城の事例とされ、昭和 56 年、国史跡に指定された。現在、安田城歴史の広場として整備を行い、市民憩いの場として活用されている。また白鳥城や、北西 3.3km にある大蛎城といった城館遺跡は、安田城と同じく佐々攻めの際の拠点とされている。本遺跡の北西 1.7 kmには鎌倉～室町時代の金屋南遺跡（15）がある。溝で区画された計画的構造の集落で、掘立柱建物、井戸跡、畠跡、道路跡や製鉄関連遺構を検出した。白鳥城や大蛎城、安田城の中間に位置するため、関連が何える〔富山市教委 2007〕。

図14　周辺の遺跡分布図（S＝1/25000）



調査地周辺の航空写真(1946年米軍撮影　上が北)　▲印の交点が調査地

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

調査区は、幅１～２mと細長いため、便宜上西側、北側、東側の３つに細分した。発掘調査は、最初に耕作土を試掘調査の結果をふまえながら上層遺構検出面直上までバックホウにより掘削・除去した。その後、遺構検出から人力による掘削を行った。

当初、上層遺構が調査区西側半分に存在する想定であったが、調査を進めると上層遺構は調査区西側のごく一部で検出した。遺構検出後、遺構掘削を行った。下層は、調査区全体に遺物包含層が堆積するため、遺物包含層掘削後、遺構検出、遺構掘削を行った。上下層とも遺構は断面観察用の畦を残して掘削し、ピットや小さな土坑は半截した後、断面を写真と図面に記録し、完掘した。

測量基準点は、国家座標第Ⅶ系を使用した。図面は、平面図・断面図とも縮尺20分の１を基本として作成した。

カメラは現地調査ではデジタルカメラとブローニー（6×7）サイズを使用し、フィルムはカラーリバーサルと白黒を使用した。遺物写真は、デジタルカメラを使用した。　（綴辻）

第２節　層　序（図15）

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。

層序は、部分的に見られる撹乱などを除き、以下の５つの層に分けることができる。今回の調査ではⅡ層上面（上層）およびⅢ層上面（下層）で遺構の検出を行った。

Ⅰ層：表土・耕作土

Ⅱ層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（上層検出面、炭化物・鉄混）

Ⅱ-②層：10YR3/3 暗褐色粘土（下層遺物包含層、炭化物混）

Ⅲ層：10YR4/4 褐色粘質シルト～砂質シルト（下層検出面、地山）

Ⅳ層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂

調査区の旧地形は、西から東に向かって緩やかに傾斜しており、調査区東側では、上層遺構は後世の削平を受けていると考えられる。

また、Ⅳ層がⅢ層を突き破っている部分がある。過去の友坂遺跡の発掘調査では、地震による噴砂が確認されており、今回の調査区も地震による液状化の痕跡と推定した。

第３節　遺構（図15～19、表２・３、図版８～11）

遺構は、上層・下層ともに調査区西側および北側で集中して検出した。時期としては上層面ではおおむね戦国期の土坑・溝、下層面では平安時代後半～中世の井戸２か所・溝・土坑・ピットを確認した。下層の遺構は土師器と中世の遺物が混在し、時期幅があると考えられる。

１　上層（戦国時代）

(1)土坑

ＳＫ01　調査区西側南寄りで検出した。楕円形を呈する。検出長0.6m、検出幅0.5m、深さ0.15m。断面は不整形である。遺構埋土は２層に分けられ、自然堆積と考えられる。炭化物の混入を確認した。焼土や硬化面等は確認できなかった。遺物は中世土師器が出土した。

ＳＫ02　調査区西側南寄りで検出した。遺構の東側は調査区外のため、遺構の全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。検出長1.3m、検出幅1.0m、深さ0.3m。断面は不整形である。遺構埋土は２層に分けられ、自然堆積と考えられる。炭化物等は混入しない。焼土や硬化面等は

確認できなかった。遺物は中世土師器・青磁が出土した。出土遺物から、おおむね戦国時代と考えられる。

ＳＤ03　調査区北側で検出した。遺構の東側および西側は調査区外であるため全容は不明であるが、平面形は方形を呈すると考えられる。検出長 2.8m、検出幅 1.5m、深さ 0.1m。断面は台形である。遺構埋土は２層に分けられ、自然堆積と考えられる。炭化物等は混入しない。焼土や硬化面等は確認できなかった。遺物は中世土師器が出土した。

ＳＫ05　調査区北側で検出した。遺構の南側は調査区外であるため、遺構の全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。検出長 2.3m、検出幅 1.4m、深さ 0.2m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。炭化物等は混入しない。焼土や硬化面等は確認できなかった。遺物は中世土師器・不明鉄製品が出土した。

(2)溝

ＳＤ06　調査区中央部で検出した。遺構の北および南側は調査区外であるため全容は不明であるが、不整形を呈すると考えられる。検出長 0.8m、検出幅 0.7m、深さ 0.2m。断面はＵ字形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。一部に礫の混入を確認した。焼土や硬化面等は確認できなかった。遺物は中世土師器が出土した。

番号	平面形態	検出長(m)	検出幅(m)	深さ(m)	断面形態	出土遺物	備考
ＳＫ01	楕円形	0.6	0.5	0.15	不整形	中世土師器	
ＳＫ02	楕円形？	1.3	1.0	0.3	不整形	中世土師器・青磁	
ＳＫ03	不整形？	2.8	1.5	0.1	台形	中世土師器	
ＳＫ05	楕円形？	2.3	1.4	0.2	不整形	中世土師器・不明鉄製品	
ＳＤ06	不整形？	0.8	0.7	0.2	Ｕ字形	中世土師器	

表２　上層遺構一覧表

２　下層(平安時代後半～中世)

(1)井戸

ＳＥ10　調査区西側南端で検出した。遺構の南および東側は調査区外である。ＳＫ11 と新旧関係が見られＳＫ11 より古い。円形を呈すると考えられる素掘り井戸である。検出長 1.8m、検出幅 1.5m、深さ 1.0m、復元すると直径 5.4mとなる。断面は緩い舟底形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられ、南東側の一部をＳＫ11 に切られている。炭化物の混入を確認した。礫の混入や、石材などの残留、焼土や硬化面等は確認できなかった。遺物は中世土師器・珠洲・越前・青磁が出土した。出土遺物から、おおむね中世と考えられる。

ＳＥ24　調査区中央部で検出した。遺構の北および南側は調査区外である。円形を呈すると考えられる素掘り井戸である。検出長 1.8m、検出幅 0.85m、深さ 1.2m。断面はＵ字形である。遺構埋土は２層に分けられ、自然堆積と考えられる。遺構底面近くに炭化物および礫の混入を確認した。焼土や硬化面等は確認できなかった。遺物は土師器、中世土師器・珠洲が出土した。出土遺物からおおむね平安後期～鎌倉と考えられ、ＳＥ10 より古いと考えられる。

(2)土坑

ＳＫ11　調査区西側南端で検出した。遺構の東側は調査区外である。長方形を呈すると考えられる。検出長 1.0m、検出幅 0.5m、深さ 0.15m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。埋土には炭化物の混入を確認した。焼土や硬化面、柱痕跡、礫の混入等は確認できなかった。ＳＥ10 と新旧関係が見られ、ＳＥ10 より新しい。遺物は中世土師器・焼成粘土塊が出土した。

ＳＫ19　調査区北側で検出した。楕円形を呈する。検出長 0.6m、検出幅 0.5m、深さ 0.1m。断面

は台形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。炭化物等は混入しない。焼土や硬化面等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＫ20　調査区北側で検出した。円形を呈する。直径 0.4m、深さ 0.1m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。炭化物等は混入しない。埋土には握り拳大の礫が混入する。焼土や硬化面等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＫ23　調査区中央で検出した。遺構の北東および南西側は調査区外である。直線を呈すると考えられる。検出長 1.0m、検出幅 0.7m、深さ 0.1m。断面は台形である。遺構埋土は単層で一気に埋まったと考えられる。炭化物を確認した。焼土や硬化面等は確認できない。出土遺物はなかった。

ＳＫ29・ＳＫ30　調査区中央部で検出した。遺構の南西側は調査区外である。円形を呈すると考えられる。検出長 1.2m、検出幅 0.65m、深さ 0.55m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。炭化物等は混入しない。焼土や硬化面等は確認できなかった。遺物は土師器・焼成粘土塊が出土した。

(3)溝

ＳＤ16　調査区北側で検出した。遺構の北および南側は調査区外である。不整形を呈すると考えられる。検出長 3.5m、検出幅 1.5m、深さ 0.2m。断面は舟底形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。北東側遺構底部には多数の礫が混入する。焼土や硬化面等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＤ22　調査区中央部で検出した。遺構の北東および南西側は調査区外である。直線を呈すると考えられる。検出長 1.0m、検出幅 0.8m、深さ 0.25m。断面は舟底形である。北東および南西側を調査区端に切られているため、遺構の全容は不明である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられ、南東側の一部が後世の攪乱を受けている。炭化物の混入を確認した。焼土や硬化面等は確認できなかった。出土遺物には中世土師器がある。

ＳＤ25　調査区中央部で検出した。遺構の北および南側は調査区外である。直線を呈すると考えられる。検出長 2.5m、検出幅 0.9m、深さ 0.15m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。炭化物の混入を確認した。焼土や硬化面等は確認できなかった。出土遺物には中世土師器・珠洲がある。

ＳＤ33　調査区東端で検出した。遺構の東および西側は調査区外である。直線を呈すると考えられる。検出長 4.4m、検出幅 1.55m、深さ 0.4m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。南西側遺構底部には握り拳大の礫が混入する。炭化物等は混入しない。焼土や硬化面等は確認できなかった。出土遺物には土師器、中世土師器・土錘がある。

ＳＤ35　調査区南側で検出した。遺構の北西および南東側は調査区外である。直線を呈すると考えられる。検出長 2.7m、検出幅 0.7m、深さ 0.35m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。出土遺物には中世土師器がある。

(4)ピット

ＳＰ12　調査区北側で検出した。遺構の北西側は調査区外である。円形を呈すると考えられる。検出長 0.2m、検出幅 0.15m、深さ 0.2m。断面はU字形、遺構埋土は単層で一気に埋まったと考えられる。炭化物の混入を確認した。柱痕跡や柱の当り、焼土等は確認できない。出土遺物はなかった。

ＳＰ13　調査区北側で検出した。円形を呈する。長軸 0.25m、短軸 0.2m、深さ 0.15m。断面はU字形である。遺構埋土は単層で一気に埋まったと考えられる。炭化物等は混入しない。柱痕跡や柱の当り、焼土等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＰ14　調査区北側で検出した。楕円形を呈する。長軸 0.3m、短軸 0.2m、深さ 0.2m。断面はU

字型である。遺構埋土は単層で一気に埋まったと考えられる。炭化物等は混入しない。柱痕跡や柱の当り、焼土等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＰ15　調査区北側で検出した。円形を呈する。長軸 0.45m、短軸 0.35m、深さ 0.15m。断面はU字型である。遺構埋土は３層に分けられ、中央に柱痕跡が見られる。柱痕跡はほぼまっすぐで、柱の抜取穴は確認できない。このため、柱は抜き取られず自然に腐食して失われたと考えられる。遺構底部に直径 0.1m、深さ 0.02mの柱の当りを確認した。出土遺物はなかった。

ＳＰ26　調査区中央部で検出した。円形を呈する。直径 0.3m、深さ 0.2m。断面は台形、遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。炭化物の混入を確認した。柱痕跡や柱の当り、焼土等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＰ27　調査区中央部で検出した。円形を呈する。長軸 0.3m、短軸 0.25m、深さ 0.1m。断面は舟底形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。炭化物等は混入しない。柱根や柱の当り、焼土等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＰ31　調査区中央部で検出した。円形を呈する。直径 0.35m、深さ 0.15m。断面はU字形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。炭化物等は混入しない。柱痕跡や柱の当り、焼土等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＰ32　調査区中央部で検出した。遺構の南西側は調査区外である。円形を呈すると考えられる。検出長 0.5m、検出幅 0.2m、深さ 0.2m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。炭化物等は混入しない。柱痕跡や柱の当り、焼土等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＰ34　調査区北側で検出した。円形を呈する。直径 0.25m、深さ 0.15m。断面はU字型である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。炭化物等は混入しない。柱根や柱の当り、焼土等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

ＳＰ36　調査区中央部で検出した。遺構の南西側は調査区外である。円形を呈すると考えられる。検出長 0.3m、検出幅 0.1m、深さ 0.1m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。炭化物等は混入しない。柱根や柱の当りは確認できなかった。出土遺物はなかった。（三上）

番号	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	断面形態	出土遺物	備考
ＳＥ10	円形？	1.8	1.5	1.0	舟底型	中世土師器・珠洲・越前・青磁	
ＳＫ11	長方形	1.0	0.5	0.15	台形	中世土師器	
ＳＰ12	円形？	0.2	0.15	0.2	U字形		
ＳＰ13	円形	0.25	0.2	0.15	U字形		
ＳＰ14	楕円形	0.3	0.2	0.2	U字形		
ＳＰ15	円形？	0.45	0.35	0.15	U字形		
ＳＤ16	不整形？	3.5	1.5	0.2	舟底型		
ＳＫ19	楕円形	0.6	0.5	0.1	台形		
ＳＫ20	円形	0.4	0.4	0.1	台形		
ＳＤ22	直線？	1.0	0.8	0.25	舟底型	中世土師器	
ＳＫ23	直線？	1.0	0.7	0.1	台形		
ＳＥ24	円形？	1.8	0.85	1.2	U字形	土師器・中世土師器・珠洲	
ＳＤ25	直線？	2.5	0.9	0.15	不整形	中世土師器・珠洲	
ＳＰ26	円形	0.3	0.3	0.2	台形		
ＳＰ27	円形	0.3	0.25	0.1	舟底形		
ＳＫ29	円形？	1.2	0.65	0.2	U字形		
ＳＫ30				0.55	不整形	土師器・焼粘土塊	
ＳＰ31	円形	0.35	0.35	0.15	U字形		
ＳＰ32	円形？	0.5	0.2	0.2	台形		
ＳＤ33	直線？	4.4	1.55	0.4	不整形	土師器・中世土師器・土錘	
ＳＰ34	円形	0.25	0.25	0.15	U字形		
ＳＤ35	直線？	2.7	0.7	0.35	台形	中世土師器	
ＳＰ36	円形？	0.3	0.1	0.1	台形		

表３　下層遺構一覧表

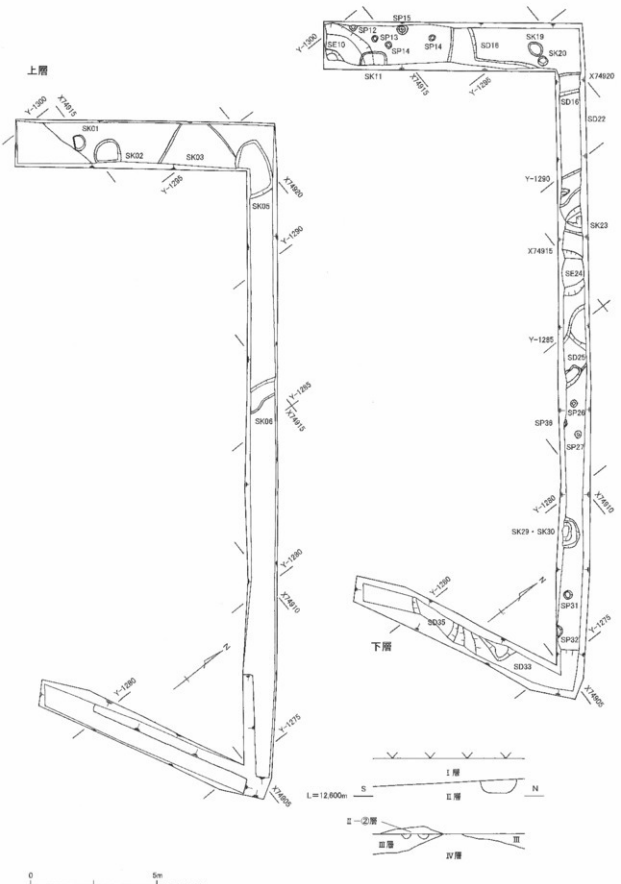


図15 調査区全体図(S＝1/150)・基本層序模式図(深さのみ1/40)

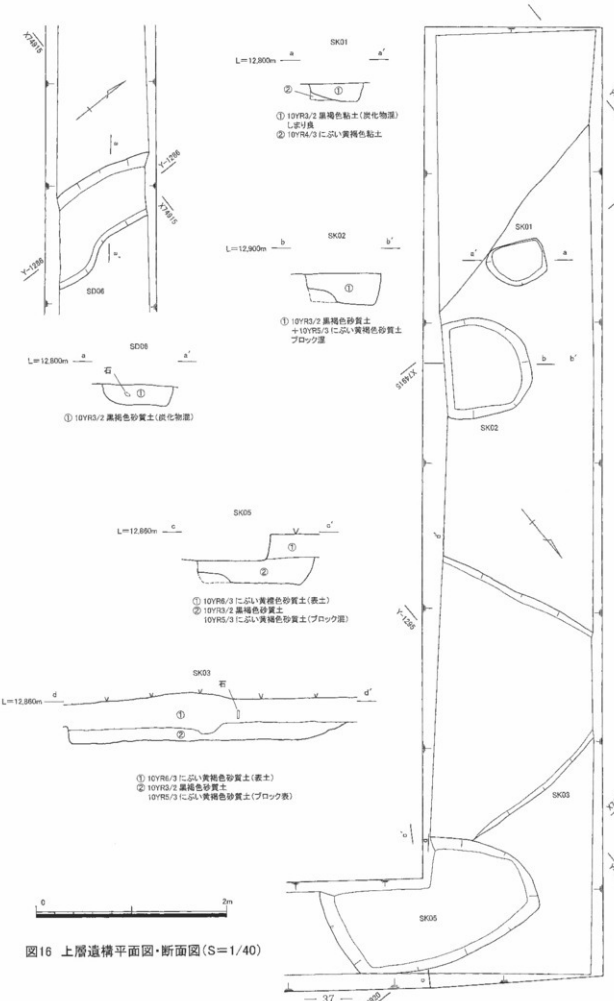


図16　上層遺構平面図・断面図（S＝1/40）

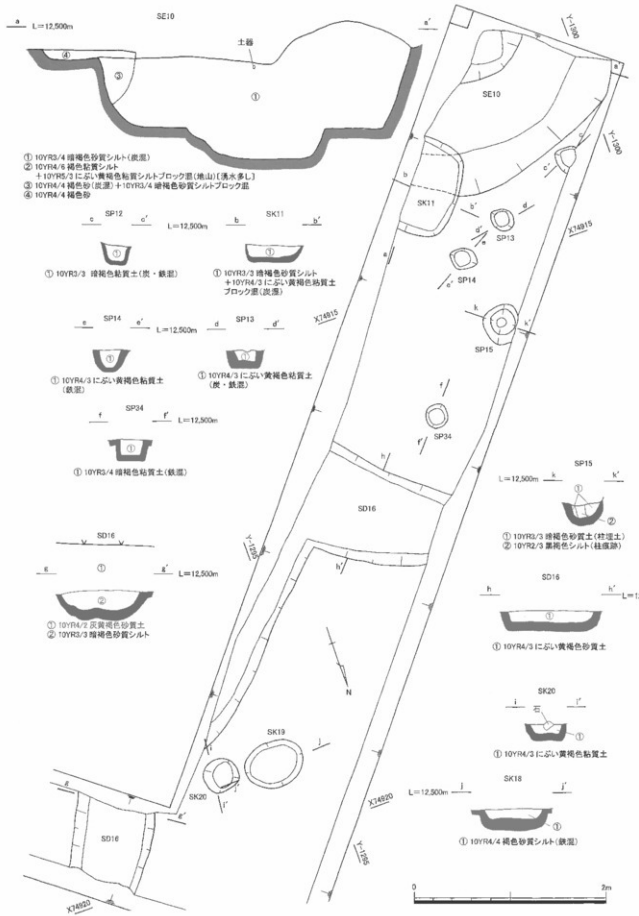


図17 下層遺構平面図・断面図(1)(S=1/40)

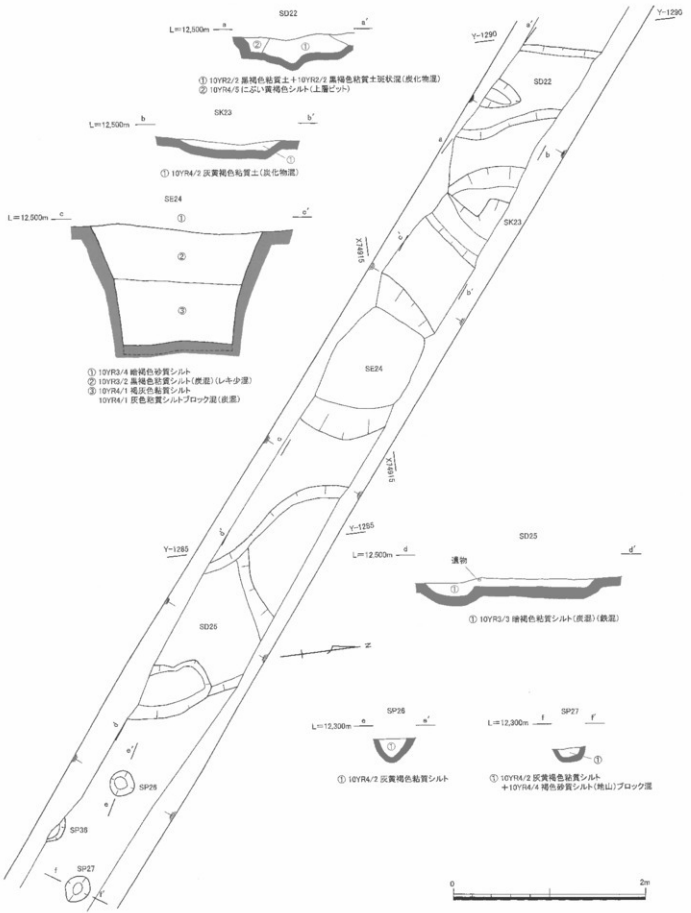


図18　下層遺構平面図・断面図(2)（S＝1/40）

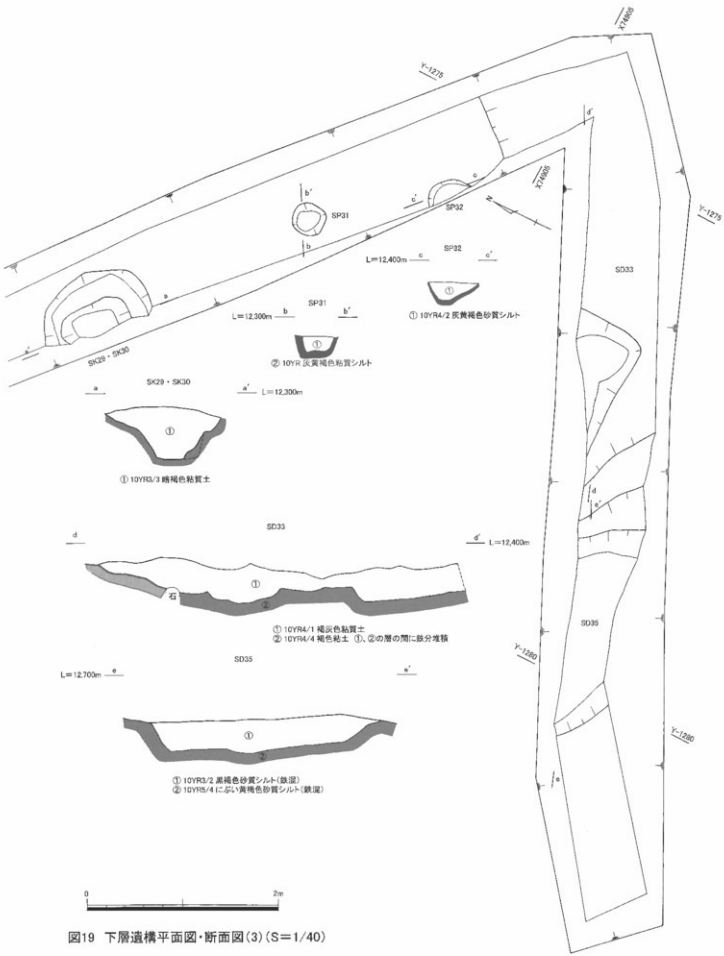


図19 下層遺構平面図・断面図(3)(S=1/40)

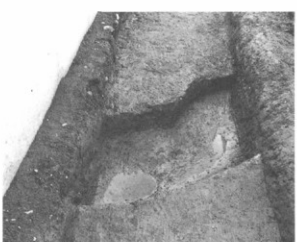
上層全景（東から）

上層西側調査区完掘（南から）

上層北側調査区完掘（西から）

上層東側調査区完掘（北から）

上層遺構完掘（南東から）



SD06完掘（西から）

SK02完掘（西から）

SK01完掘（西から）

下層全景（東から）

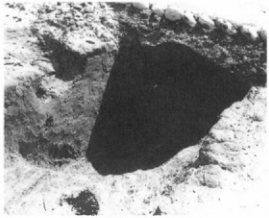
西側調査区完掘（南東から）

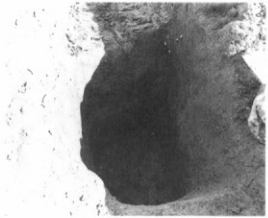
下層全景（東から）

北側調査区完掘（西から）

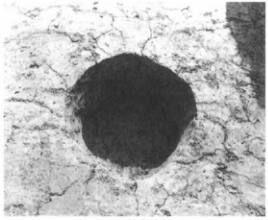
SP15検出（東から）

SP15完掘（東から）

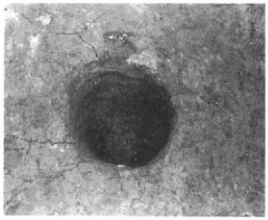

SE10完掘（北西から）


SE24完掘（西から）

SD16西部分完掘（西から）


SP34完掘（北から）

SP12完掘（北から）


SP26完掘（西から）

第4節　遺物（図20、表4、図版12）

今回の調査では、土師器・須恵器、中世土師器・珠洲・越前・青磁などがコンテナボックス（60cm×40cm×10cm）に換算して9箱出土した。

1　遺構出土遺物（図20　1～12）

1は青磁壺の胴部である。内湾しながら立ち上がる。全体をロクロ成形し、外面に櫛状工具による濃文を施す。釉薬は青みがかった明オリーブ灰色である。胎土は精良、焼成良好である。梅瓶のようなプロポーションと考えられる。調査区西のＳＫ02から出土した。2は中世土師器皿である。緩く内湾しながら直線状に立ち上がる口縁部である。口縁端部は丸く収める。薄手で手づくね成形である。磨滅が激しいためナデ等の調整の痕跡は確認できない。胎土は密、焼成はやや不良である。煤や炭化物等は付着しない。調査区中央のＳＫ05から出土した。3・4は青磁碗である。同一個体の可能性がある。3は碗の口縁部分である。胴部から直線状に立ち上がり、口縁端部は内側が外傾し、口縁外側は直線状に丸く収める。胎土は精良、焼成は良好である。内外面ともに緑色の強い釉薬がかかる。外面には蓮弁文を施す。4は碗の底部である。内外面とも緑色の強い釉薬がかかる。外面は高台部分まで釉薬がかかる。高台は削出高台である。内面底部には濃文を8つ施す。外面は蓮弁文を施す。5は中世土師器と考えられる広口壺である。球状の体部から頸部で緩く締り、口縁端部に向かって内湾しながら立ち上がる。口縁端部には指頭による緩い波状口縁を施す。外面は口縁部ナデ、頸部から胴部全体にかけてケズリを施す。内面は口縁部ナデ、頸部から胴部にかけてはヘラ状の工具による調整を施す。胴部下位には工具の痕跡が残る。内外面ともに炭化物が付着する。3～5はＳＥ10から出土した。6は中世土師器皿である。緩く内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く収める。口縁に横ナデを施す。煤・炭化物等は付着しない。ＳＤ22から出土した。7～9は土師器塊の底部である。いずれも底部の一部分で、焼成は良好、胎土は密である。ロクロ整形である。ロクロ回転方向は時計回りである。底部外面には回転糸切りの痕が残る。7は赤彩されていた可能性がある。7・8はＳＥ24から、9はＳＤ33から出土した。10世紀代か。10・11は中世土師器皿である。10は口縁と底部の間で屈曲し短い口縁部が立ちあがる。口縁部と底部の間には、明瞭ではないが段があり、コースターのような器形である。全体を手づくね、口縁部に横ナデを施す。胎土は密、焼成は良好である。煤・炭化物等は付着しない。11は口縁端部に向かって内湾しながら緩く立ち上がる。磨滅が激しく全体の調整は不明である。胎土は密、焼成はやや不良である。内外面に鉄分の沈着が見られる。煤・炭化物等は付着しない。12は管状土錘である。縦半分に割れており、1/2残存する。全体を手づくね成形する。両端は成形後、板状の工具で切り離し、平坦に整えている。胎土はやや粗、焼成はやや不良である。細辻氏分類の樽型ｃ類である。10～12はＳＤ33から出土した。

2　包含層その他出土遺物（図20　12～26）

13・14は土師器である。13は塊の底部である。磨滅が激しく調整不明だが厚めの高台部分底面に回転糸切りの痕跡がわずかに残ることからロクロ成形である。高台の内側は平坦である。胎土は密、焼成良好である。煤・炭化物等は付着しない。赤彩等は見られない。14は塊か皿の底部である。磨滅が激しく調整不明だが、全体をロクロ成形し、底部外面に回転糸切りの痕跡がわずかに残る。胎土は密、焼成はやや不良である。煤・炭化物は付着しない。赤彩等は見られない。15は須恵器の鉢の口縁部である。口縁端部に向かってわずかに内湾しながら延び、端部を板状工具で面取りする。胎土は精良、焼成は良好である。16・17は中世土師器皿である。16は、口縁端部に向かって細くなりながら真っすぐ伸びる。口縁部の内外面を横ナデする。胎土は密、焼成はやや不良である。煤・炭化物等は付着しない。17は、口縁に向かって内湾し、口縁端部は丸く収める。胎土は密、焼成はやや不良である。煤や炭化物等は付着しない。13～17は下層包含層から出土した。18は須恵器坏蓋である。外面の中ほど

で屈曲し、頂部が扁平となる器形である。口縁端部を摘み出し、断面三角形を呈する。外面は頂部が回転ヘラ切り、口縁端部までロクロナデ、内面はロクロナデである。胎土は精良、焼成は良好である。全体にゆがみがあり、内面に付着物があることから、未製品の可能性がある。19は坏Bである。体部は丸く、緩く内湾しながら立ち上がり、外反しながら口縁端部を丸く収める。内外面ともロクロナデ成型である。底部はヘラ切り後、櫛状工具で不定方向にナデ消ししている。貼付高台で外に踏ん張る。底部に貼付の後ナデ消しした痕跡が残る。胎土は精良、焼成は良好である。20・21は中世土師器・皿である。20は薄手で、口縁部で外反しながら口縁端部を丸く収める。内外面とも調整不明、煤・炭化物等は付着しない。胎土は密、焼成は良好である。焼成時の黒斑が見られる。21は内湾しながら立ち上がり口縁端部を丸く収める。内外面とも調整不明、煤・炭化物等は付着しない。胎土は密、焼成は良好である。18～21は表土掘削で出土した。22は珠洲の甕か壷の口縁部分でやや外反し端部は丸く収める。口縁端部外面に指頭痕、自然釉がかかる。23は中世土師器皿である。緩く内湾しながら立ち上がる。口縁端部に煤が付着する。胎土は密、焼成は良好である。24～26は管状土錘である。全て細辻氏分類の寸胴型ａ類である。25は焼成時の黒斑が見られる。22～26は試掘調査で出土した。

表4　出土遺物観察表

番号	出土地点	形態				胎土		焼成	色調		成形・調整		備考
		器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	質	砂粒		内面	外面	内面	外面	
1	ＳＫ02	青磁壺？	－	(7.0)	－	精良		良	10YR/1 灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ 櫛文	胎土 N8/灰白
2	ＳＫ05	中世土師器 皿	11.2	3.0	6.8	密		やや不良	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰黄褐	10YR6/1 灰白 10YR6/3 にぶい黄橙	手づくね	手づくね	
3	ＳＥ10	青磁碗	19.8	(2.8)	－	精良		良	5GY6/1 オリーブ灰	5GY6/1 オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ 蓮弁文	胎土 7. 5Y8/1 灰白 3-4 周一個体か？
4	ＳＥ10	青磁碗	－	(2.8)	5.6	精良		良	5GY6/1 オリーブ灰	5GY6/1 オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ 蓮文	胎土 7. 5Y7/1 灰白 3-4 周一個体か？
5	ＳＫ10	中世土師器 広口壺	23.2	(9.1)	－	密		良	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR3/1 黒褐	10YR3/2 黒褐 10YR6/3 にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	ＳＤ22	中世土師器 皿	11.4	(2.6)	－	密		良	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐 10YR8/3 浅黄橙	口縁部 ヨコナデ	口縁部 ヨコナデ	
7	ＳＥ24	土師器 壺	－	(1.0)	5.0	密		やや不良	10YR8/3 浅黄橙	7. 5YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切	ロクロ回転方向 時計回り
8	ＳＥ24	土師器 壺	－	(1.3)	5.8	密		やや不良	2. 5YR8/2 灰白	2. 5YR8/2 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切	ロクロ回転方向 時計回り
9	ＳＤ33	土師器 壺	－	(1.4)	4.6	密		やや不良	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙 2. 5Y4/6 オリーブ褐	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切	底部外面の一部 分に銹分付着
10	ＳＤ33	中世土師器 皿	8.8	(1.3)	(3.0)	密		良	10YR8/3 浅黄橙 10YR5/4 にぶい黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	手づくね	手づくね	
11	ＳＤ33	中世土師器 皿	12.4	(2.4)	－	密		やや不良	2. 5Y8/1 灰白 10YR5/6 黄褐	2. 5Y8/1 灰白	手づくね	手づくね	内・外面銹分付着
12	ＳＤ33	土錘	(6.4)	(4.3)	(2.0)	密		やや不良	2. 5Y6/1 黄灰	10YR7/2 にぶい黄橙 2. 5Y6/1 黄灰	手づくね	手づくね	
13	下層包含層	土師器 塊？	－	(3.0)	7.2	密		やや不良	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切	
14	下層包含層 （北側）	土師器 坏	7.6	2.2	4.2	密		やや不良	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切	
15	下層包含層	須恵器 鉢？	23.6	(3.1)	－	精良		良	N5/灰	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ （ヘラ使用？）	口縁部をヘラによる面取り？
16	下層包含層 （東側）	中世土師器 皿	14.6	(2.6)	－	密		良	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	手づくね	手づくね	
17	下層包含層 （西側）	中世土師器 皿	6.8	(1.2)	－	密		やや不良	2. 5Y8/3 浅黄	2. 5Y8/3 浅黄	手づくね	手づくね	
18	表土掘削 （西側）	須恵器 坏蓋	20.6	(1.6)	－	精良		良	2. 5Y7/1 灰白	N4/～N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ 回転ヘラ切	口縁部内側に銹 分付着ひずみ有
19	表土掘削 （西側）	須恵器 坏B	17.0	4.2	11.4	精良		良	2. 5Y7/1 灰白	10YR5/1 褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ 静止ヘラ切り？	貼付高台
20	表土（西側）	中世土師器 皿	10.0	1.6	4.0	密		良	7. 5YR6/6 橙	7. 5YR6/6 橙	手づくね	手づくね	口縁部 10YR5/1 褐灰
21	表土掘削 （西側）	中世土師器 皿	11.4	2.4	5.4	密		良	2. 5Y8/2 灰白	2. 5Y8/2 灰白	手づくね	手づくね	
22	試掘	珠洲壺	45.4	(6.5)	－	密		良	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁端部指跡 自然釉？
23	試掘	中世土師器 皿	8.6	(2.2)	－	密		良	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	手づくね	手づくね	口縁部タール付 着
24	試掘	土錘	4.2	1.1	0.4	やや脆		やや不良	2. 5Y7/3 浅黄	2. 5Y7/3 浅黄	手づくね	手づくね	
25	試掘	土錘	3.5	1.1	0.4	やや脆		やや不良	2. 5Y7/3 浅黄	2. 5Y7/3 浅黄	手づくね	手づくね	外面黒斑
26	試掘	土錘	3.0	1.1	0.5	やや脆		やや不良	2. 5Y7/3 浅黄	2. 5Y7/3 浅黄	手づくね	手づくね	

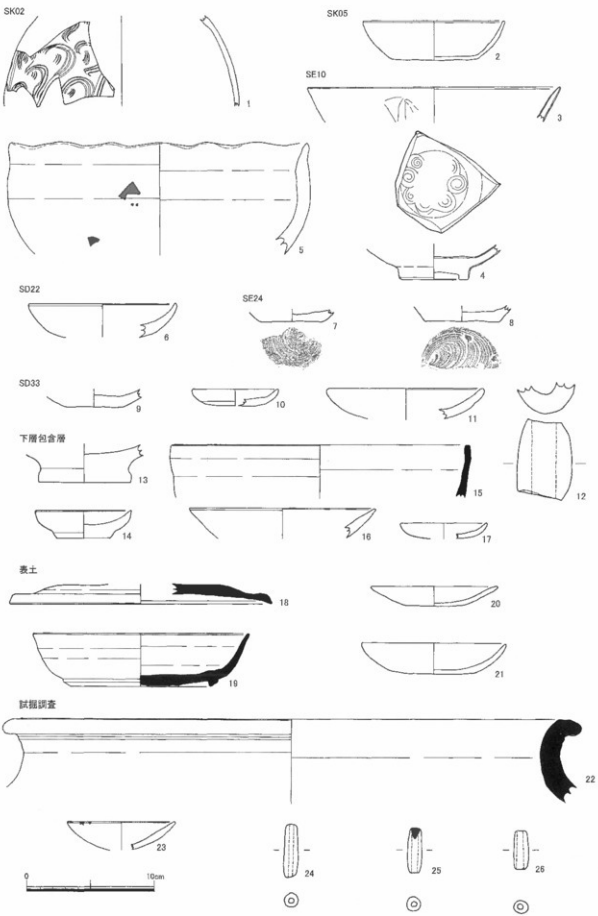
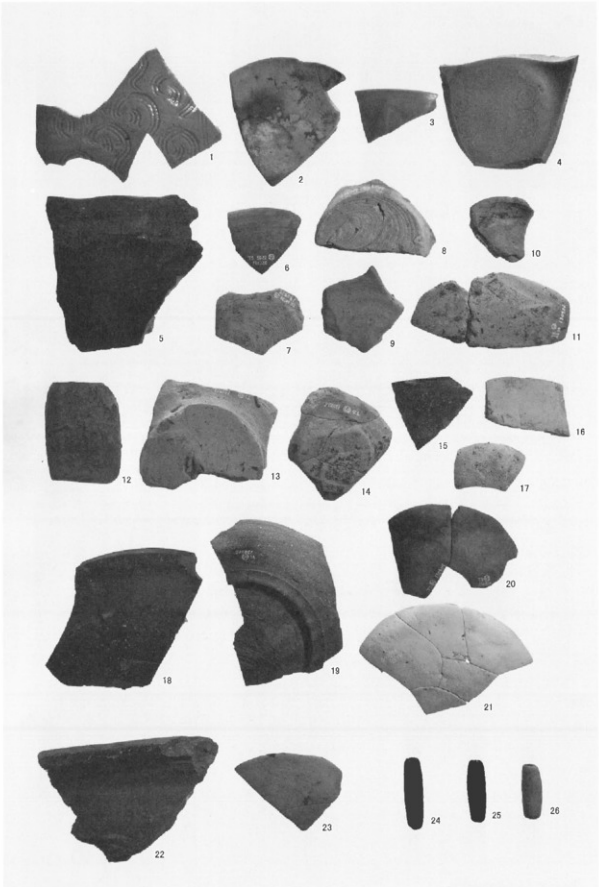


図20 出土遺物実測図(S=1/3)



出土遺物写真（数字は実測図番号と一致する）

第4章　総括

友坂遺跡は、従来縄文から近世までの複合遺跡であると周知されている。過去の調査では主に古代・中世の遺構・遺物を確認しており、今回の調査では、上層は戦国時代の遺構・遺物、下層は平安～中世の遺構・遺物を確認した。過去の調査では、主要地方道富山庄川線よりも西側でのみ遺跡が確認されていたが、今回の調査で、道路の東側にも、古代～中世の遺跡が広がっていることを確認した。

第1節　井戸について

1　遺構の概要

今回の調査では、50㎡あまりの狭い調査区にもかかわらず、素掘りの井戸を2基検出した。

調査区南西端で検出したＳＥ10は、検出長1.8m、検出幅1.5m、深さ1.0mで、遺構の平面形は円形、断面形は深くなるに従って狭くなる、いわゆるすり鉢状を呈する素掘りの井戸である。埋土の堆積はほぼ単層で、全体に炭化物がわずかに混じる。井戸の底に礫や敷物などは見られない。井戸枠の痕跡や石の抜き取り等は見られない。湧水はごく少量であることから、枯れてしまった井戸を、人為的に埋め戻した可能性がある。息抜きの有無、痕跡は不明である。出土遺物には、中世土師器・珠洲・越前・青磁がある。

調査区北側中央で検出したＳＥ24は、検出長1.8m、検出幅0.85m、深さ1.2mで、遺構の平面形は円形、断面形は、内壁がやや真っ直ぐに立ち上がるU字形を呈する素掘りの井戸である。埋土の堆積は2層で、上層が黒色、下層は水位が高いためか青灰色の粘り気の強い粘土である。埋土全体に炭化物がわずかに混じる。井戸枠の痕跡や石組の残石は見られない。井戸の底には礫と炭化物が見られた。湧水は現在でも一定量見られる。このことから、使用中の井戸が崩落等で埋まってしまい、廃棄されたと考えられる。息抜きの有無、痕跡は不明である。出土遺物には、土師器、中世土師器・珠洲がある。

井戸の時期差は、出土遺物の時期からＳＥ24が古く、ＳＥ10が新しい。

2　井戸の構造から見た集落の性格

人々が、生活の上で欠かせない水を確保し、井戸を維持していく上で大きな問題になるのは、掘方の壁が崩壊しないことである。特に沖積平野の砂層などでは、湧水により掘方がすぐに崩壊してしまう。井戸の掘方を維持するため、様々な構造の木組井戸や石組の井戸が発生し、発達してきた。

今回調査区の井戸2基は、両方とも素掘りの井戸であり、井戸の種別では最も簡素なつくりである。簡素であるということは、井戸を掘るのに労力や時間がかからない。一方で、掘方の壁が崩落しやすく、維持するのに手間がかかるといえる。

友坂遺跡では、過去の発掘調査で中世の館跡などから木組井戸や石組井戸を確認しており、この時代に堅固な井戸を築く技術や知識が伝わっていたことは確認できる。

このことから、今回検出した井戸は、手間をかけずに早く掘る必要があり、しかも手入れをしながら長く使う目的ではなかったと考えられる。

つまり、今回の発掘調査で確認した集落は、北方にある館などの定住地とは違い、臨時に水を必要とする、集落の縁辺部や耕作地の野井戸のような土地利用であったと考えられる。

なお、素掘り井戸の場合、発掘調査で検出した掘方が、井戸の原形を保っているとは限らないため、注意が必要である。井戸の材料を再利用する際、井戸の掘方よりも材料の抜取り穴を一回り大きく掘った方が、容易に材料を抜き取ることができるからである。特にＳＥ10は、検出した平面の大きさから復元できる大きさが直径約5.4mとなり、素掘り井戸の大きさとしては大きすぎる。また、断面の傾

斜も緩いことから、本来は直径2～3mの井戸であったが、井戸の材料を抜き取るために、大きく掘り広げられた可能性も考慮しておきたい。

また、友坂遺跡の井戸からは、半数から輸入陶磁器が出土する。井戸の構造などによる様相の違いは現在のところ確認できない。輸入陶磁器の井戸からの出土がどのような意味を持つのか、今後、近隣の調査や類例の増加を待って、詳細な分析を試みたい。（細辻）

＜引用・参考文献＞

宇野隆夫 1982『井戸考』『史林』第65巻　第5号

鍵方正樹 2003『井戸の考古学』同成社

中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

財富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所 1996『極原垰摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』

富山市教育委員会 1970『富山市金草第一号窯跡調査報告』

富山市教育委員会 1973『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　富山市杉谷(67・81・64番)遺跡』

富山市教育委員会 1974『境野新遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』

富山市教育委員会 1976『富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書』

富山市教育委員会 1983『古沢A遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会 1984『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』

富山市教育委員会 1985『富山市野下遺跡　発掘調査概要』

富山市教育委員会 1999『富山市舘谷南遺跡』富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ

富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 2000『富山市西金屋遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会 2002『富山市舘谷南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』富山市埋蔵文化財調査報告124

富山市教育委員会 2002『富山市栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』富山市埋蔵文化財調査報告125

富山市教育委員会 2002『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告114

富山市教育委員会 2003『富山市開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告128

富山市教育委員会 2003『富山市開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告127

富山市教育委員会 2004『富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告136

富山市教育委員会 2006『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告18

富山市教育委員会 2006『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅰ―砂川カタダ遺跡・西二俣遺跡―』富山市埋蔵文化財調査報告10

富山市教育委員会 2007『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ』富山市埋蔵文化財調査報告17

富山市教育委員会 2011『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ―砂川カタダ遺跡・今市遺跡―』富山市埋蔵文化財調査報告44

富山市教育委員会 2012『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ―西金屋・西金屋窯跡　米田大覚遺跡―』富山市埋蔵文化財調査報告49

藤井昭二 2000『大地の記憶　―富山の自然史』桂書房

婦中町教育委員会 1984『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告書』

婦中町教育委員会 1993『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告Ⅱ』

婦中町教育委員会 1997『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ』

婦中町教育委員会 2003『富山県婦中町　鍛冶町遺跡発掘調査報告』

文化庁文化財部記念物課 2010『発掘調査のてびき』

北陸中世土器研究会編 1997『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』桂書房

細辻真澄 2001「任海官田遺跡出土の土錘について」『富山考古学研究』紀要第4号　財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

細辻真澄 2006「中近世の井戸跡について―任海官田遺跡C地区の資料より―」『富山考古学研究』紀要第9号　財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

Ⅲ　吉作（よしづくり）遺跡

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯

吉作遺跡（遺跡№2010111）は、昭和 51 年 3 月に富山市教育委員会（以下：市教委）が刊行した『富山市遺跡地図』には№75 として設定され登載されており、古くから知られた遺跡である。その後平成 5 年、市教委が刊行した『富山市遺跡地図（改訂版）』には、遺跡№201323 として掲載・周知された。現在の埋蔵文化財包蔵地面積は 2,500 ㎡である。

平成 25 年 10 月 9 日、富山市住吉地内において、個人住宅建設について埋蔵文化財包蔵地の所在確認依頼があった。建設予定地全域 391 ㎡が吉作遺跡に含まれていたため、同年 11 月 5 日に市教委で試掘調査を実施したところ、縄文時代の遺物包含層と土坑・ピットなどを検出し、縄文土器、須恵器が出土した。建設予定地全域に埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。協議の結果、宅地の外周部分の擁壁工事計画が遺構検出面よりも深く、埋蔵文化財を現地で保存することができないため、擁壁工事部分 65.82 ㎡について発掘調査を行い、記録保存することとなった。

文化財保護法 93 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、工事主体者から平成 25 年 10 月 30 日付けで市教委へ提出され、市教委の副申を付けて平成 25 年 11 月 7 日付け埋文第 313 号で富山県教育委員会へ提出した。

文化財保護法 99 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、富山市教委から平成 25 年 12 月 12 日付け埋文第 313 号により富山県教育委員会へ提出した。

第２節　発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が現地に常駐して発掘調査の監理にあたった。調査着手前に業務を受託した会社、ハウスメーカーと調査が必要な範囲について現地確認を行い、発掘調査区を設定した。

発掘作業は平成 25 年 12 月 5 日から同年 12 月 27 日まで行った。

表土掘削は平成 25 年 12 月 5 日に開始し、バックホウを用いて行った。掘削した表土は調査区外の敷地内に横置きした。12 月 6 日に表土掘削を完了した。

表土掘削完了後、12 月 9 日から、人力による遺物包含層掘削を開始した。包含層掘削の際、遺物は任意に 5m グリッドを設定し、グリッド毎に取り上げた。試掘調査結果では遺物包含層が調査区北西に向かって厚く堆積することが確認されていたが、掘削作業を始めると、激しい湧水により、掘削作業は困難を極めた。包含層掘削作業が完了した部分から遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。遺構掘削作業と並行して随時写真撮影・測量・図面作成作業を行った。

12 月 26 日には遺構掘削を終え、高所作業車による全景写真を撮影した。12 月 27 日に撤収作業を行い、現地調査を完了した。

現地調査終了後、遺物整理作業を、埋蔵文化財センターで実施中である。

平成 26 年 3 月末時点で、遺物洗浄と注記、接合を行っている。

本報告書では、遺構の概略と、代表的な遺物の写真を掲載して概要報告としていったん刊行し、次年度以降、整理作業をすすめ、発掘調査報告書を刊行する予定である。

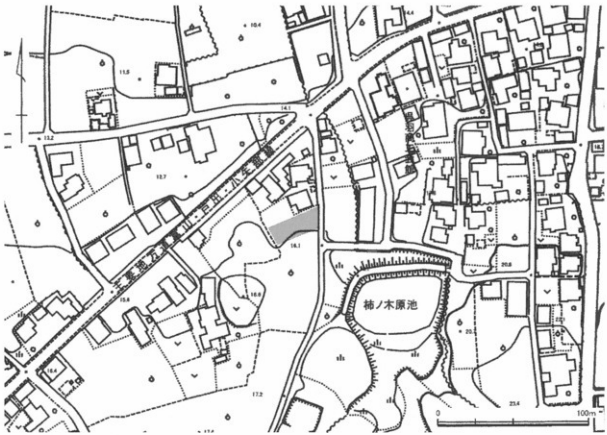


図21　調査区位置図(S＝1/2500)

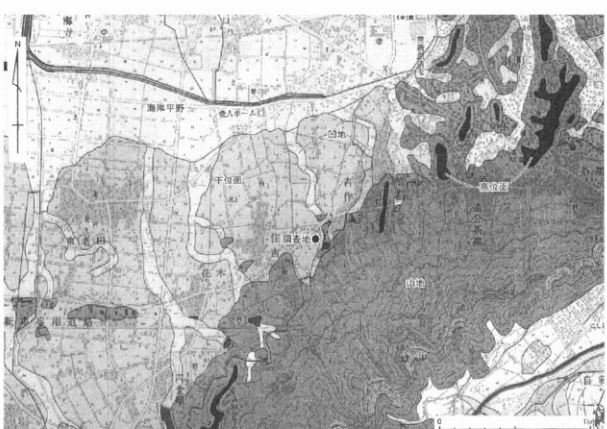


図22　遺跡周辺の地質(S＝1/25000)国土地理院2007に加筆

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置する。富山市の地勢は、大まかに山間部と平野部に大別され、南が高く、北が低くなるという地勢を示しており、海岸から標高３,000m級の高山地帯までバラエティに富んでいる。

富山平野は富山県中央部の大部分を占めており、北は富山湾と面し、東端は早月川扇状地、西端は県のほぼ中央を二分する呉羽丘陵に、南は飛騨山地から続く丘陵に接する。神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地や低位面・氾濫平野の発達が顕著である。

吉作遺跡（図 23・1）は、富山市街地から西方約５kmの富山市西部、富山市住吉・吉作地内の東西60m、南北100mに広がる縄文・奈良・平安の集落・窯跡である。

今回調査区の所在する住吉地区は、富山湾から6km内陸に入った、呉羽丘陵西麓の下位面、浅い谷、凹地、山地上に立地する（図 24）。

呉羽丘陵は、東側麓に「呉羽山断層」が存在し、東側斜面は急傾斜、西側斜面は緩傾斜地形となる。地区周辺一帯の地形は、東は最高所を城山（標高 145.3m）とする呉羽丘陵の山地や高位面があり、北西に向かって傾斜し下位面を形成する。現在は一見平坦に見えるが、下位面には呉羽丘陵を源流とする小さな開析谷が無数に入り込み、放生津潟に向かって流れ込んで多くの馬背状丘陵地形と谷底平野を発達させている。また、地区の南方には「境野新扇状地」と呼ばれる旧扇状地が存在し、幅の狭い谷や水流が認められる。

住吉地区のほぼ中央を、主要地方道富山・戸出・小矢部線が北東から南西に貫き、地区の南西 2.0kmで主要地方道富山・小杉線と交差する。地区の北方 1.3kmには、ＪＲ北陸本線が東西に走っている。主要地方道新湊・平岡線と呉羽丘陵の間には道に沿って家々が建ち並んでいる。米軍が 1946 年に撮影した航空写真（図版 13）を見ると、当時は丘陵地帯に畑地がひろがり、平地には水田が広がるのどかな耕作地であった。また江戸時代には谷地形を利用して多くの灌漑用溜池が作られ、多くは開発や造成工事のため埋め立てられたが、現在でも大小 10 あまりの溜池が残っている。調査区のすぐ南東にも、柿ノ木原池が現存する。南西 1.6kmには、動物たちとの触れ合いの場として富山市ファミリーパークがある。また南西 1.2kmには富山市ガラス造形研究所や富山市ガラス工房があり、芸術創造の場として利用されている。地区の南南西 3.0kmには富山大学医学部付属病院があり、中核病院として地域医療を担っている。

近年は、高速道路やインターチェンジなどがあり利便性が高いため、幹線道路沿いには店舗が建てられ、富山西インターチェンジの周辺には企業団地が開発されるなど、土地利用はかつてののどかな耕作地からかなり変化している。

今回の調査地は住吉地区東端の旧田地上、遺跡の中央に位置する。調査前の現況は畑地として利用されていた。調査区付近の標高は約 16mで、西に向かって緩やかに傾斜する。

第２節　歴史的環境

吉作遺跡を中心として、呉羽丘陵一帯の遺跡について概観する。

本遺跡では昭和 61 年度に今回調査区の北で宅地造成に伴う試掘調査を行い、縄文時代後期の竪穴建物、土坑を検出し、縄文土器・石器、須恵器が出土した。遺構は現地に保存された。〔富山市教委 1987〕。

本遺跡が立地する呉羽丘陵西麓一帯は、旧石器時代から中世まで遺跡の分布が濃密である。

境野新遺跡(2)では、東山系石刃技法の技法で作られたナイフ型石器が出土した。向野池遺跡では、

瀬戸内系横長剥片剥離技法による剥片が出土した〔富山市教委 2000〕。このほか杉谷H遺跡、古沢遺跡(3)、古沢A遺跡(4)などで石器が出土した。

引き続き縄文時代にも各時期にわたって遺跡が見られる。本遺跡の南南西 1.8km にある古沢遺跡では、縄文時代前期の貯蔵穴を検出した〔富山市教委 1977〕。平岡遺跡では前期の集落を検出した。開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡では、縄文時代中期の集落を検出した。射水丘陵東端の丘陵上に営まれた中核的集落をまるごと発掘調査し、竪穴建物 75 棟、大型の掘立柱建物を確認し、コハクが出土した。北押川B遺跡でも中器の遺構・遺物がある。後・晩期には、開ヶ丘中山Ⅰ遺跡で、縄文時代後期後半の竪穴建物 3 棟、縄文時代晩期後葉の竪穴建物 4 棟を検出した〔富山市教委 2003〕。古沢遺跡では、竪穴状遺構から、大洞A式期併行の土器が出土した。古沢A遺跡では巨大柱穴を検出した〔富山市教委 1983〕。このほか野下・新開遺跡や杉谷 64 番遺跡(5)、杉谷 81 番遺跡(6)でも、晩期の遺構・遺物を確認した。

弥生時代に入ると、初期農耕に不適なためか、前期～中期は遺跡の分布は低調で、遺物が散発的に出土する程度である。後期初頭に入ると、向野池遺跡では竪穴建物を検出し、東北地方に多く分布する天王山系の土器が出土した〔富山市教委 2006〕。後期後半には、白鳥城(7)で高地性集落を検出した〔富山市教委 1983〕。弥生時代後期後半から終末期になると、遺跡数が増加する。平野には砂川カタダ遺跡(8)などの集落がある〔富山市教委 2011〕。丘陵上には杉谷A遺跡(9)で方形周溝墓群などを検出した〔富山文化研究会 1975〕。

続く古墳時代前期には四隅突出墳の杉谷4号墳を含む杉谷古墳群(10)が築かれた〔富山市教委 1974〕。古墳時代中期には、塊野新遺跡・東老田Ⅰ遺跡(11)などに集落が営まれ、前方後円墳の古沢塚山古墳が築かれた。古墳時代後期には、平野に面した崖面に金屋陣ノ穴横穴墓(12)が作られた〔富山市教委 1976〕。

古代には遺跡周辺から射水丘陵東部にかけては、飛鳥・奈良・平安時代の越中における手工業生産(製陶・製鉄・製炭)の中心地帯となり、遺跡の周囲には生産遺跡が集中する。本遺跡の南西 0.7km には飛鳥時代に操業された県史跡の金草第一古窯跡(13)がある〔富山市教委 1970〕。奈良時代には南西 1.5km に位置する古沢・西金屋窯跡群(14)が広がり、大量の須恵器が出土した。西金屋窯跡では、平成5年に市道改良工事の際に須恵器窯跡を検出した。出土遺物の中には、四脚をもつ円面硯が2個体ある。大形で、官衙的性格の施設に供給された可能性がある〔富山市教委 2000〕。このほか、西金屋遺跡では、緩斜面上に奈良時代の土師器焼成遺構や集落が検出されている。古沢・西金屋窯跡群から西金屋遺跡にかけては、旧谷地形沿いに傾斜を利用した須恵器窯が操業し、丘陵には、緩斜面上に土師器焼成遺構が広がり、丘陵頂部に集落が立地していたと考えられる。向野池遺跡では、両面廂の大形掘立柱建物が検出された。生産遺跡を管理する公的な建物であると考えられている〔富山市教委 2006〕。本遺跡の南西 2.5 kmには市史跡栃谷南遺跡がある。8 世紀に操業した瓦陶兼業窯で、須恵器・土師器・製鉄関連の遺物のほか 200 点以上の軒丸瓦が出土した。古代越中における窯業生産の歴史や仏教文化の浸透の様相を解明する上で重要な遺跡である〔富山市教育委員会 2002〕。仏教関連の遺物では、向野池遺跡で瓦塔が出土した〔富山市教委 2002〕。花ノ木C遺跡(15)では、奈良時代の溝から人形・斎串が出土し、律令祭祀が行われていた〔堀沢 2004〕。

中世～近世の遺跡としては、呉羽丘陵頂部に白鳥城が築かれ、豊臣秀吉が佐々成政攻略の際、前田氏が拠点にしたとされる〔富山市教委 1981〕。井田川左岸には大峪城や安田城(16・国史跡)が築かれ、同じく佐々成政攻略の際の出城として、前田氏の家臣が入城した。中世の集落としては鎌倉～室町時代の金屋南遺跡(17)がある。溝で区画された計画的構造の集落で、掘立柱建物、井戸跡、畠跡、道路跡や製鉄関連遺構を検出した。白鳥城や大峪城、安田城の中間に位置するため、関連が伺える〔富山市教委 2007〕。

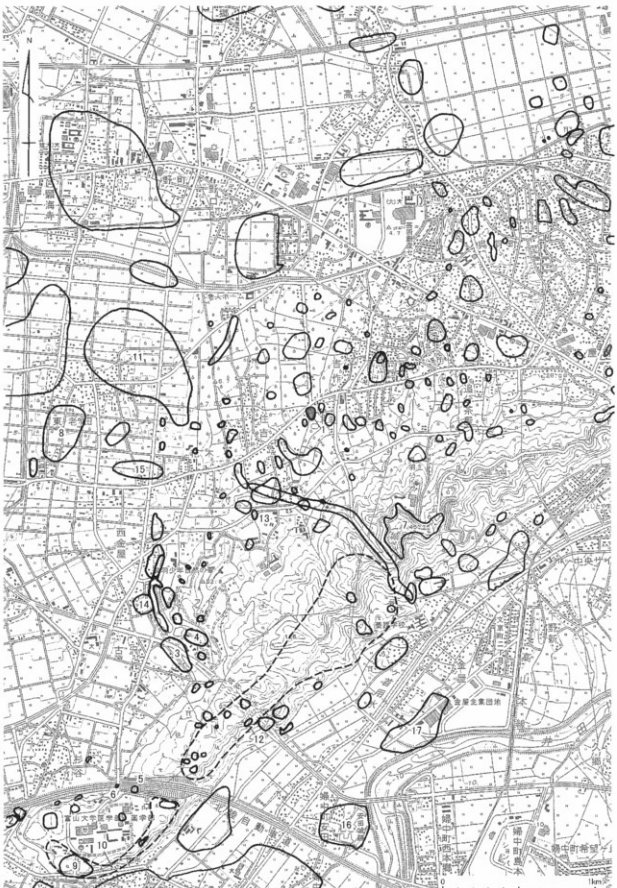


図23　周辺の遺跡分布図（S＝1/25000）

調査地周辺の航空写真（1952年米軍撮影　上が北）▲印の交点が調査地

第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

発掘調査は、最初に試掘調査の結果をふまえながら耕作土を遺物包含層直上までバックホウにより掘削・除去した。その後、遺物包含層から人力による掘削を行った。調査区西側部分はバックホウで地山面まで掘削したところ、後世の撹乱土が厚く堆積しており、遺構が残っていないことを確認したため、機械掘削のみで調査を完了した。

調査区全体に遺物包含層が厚く堆積していたため、スコップを使用し包含層掘削を行った。遺物包含層掘削を完了した部分から遺構検出、遺構掘削を行った。調査区の幅が狭いため、遺構断面は、遺構掘削完了後、調査区壁面で観察した。ピットや小さな土坑は半截した後、断面を写真と図面に記録した。遺物が出土した遺構は、遺物出土状況写真と図面に記録した後、遺物を取り上げて完掘した。遺物はトータルステーションを使用して位置と高さを記録した。

図面は、平面図・断面図・遺物出土状況図とも縮尺20分の1・縮尺10分の1を基本とし、トータルステーションを使用して作成した。

カメラは現地調査ではデジタルカメラ・ブローニー（6×7）サイズを使用し、フィルムはカラーリバーサルと白黒を使用した。遺物写真は、デジタルカメラを使用した。

第2節　層序（図24）

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。調査区の土層は、調査区一部で見られる梨の木の植樹や造成工事等による撹乱を除き、大まかに以下の3つの層に分けることができる。今回の調査では、Ⅱ層の上面で遺構検出を行った。同一検出面のため、遺物が出土しない遺構は時代を特定できなかった。

Ⅰ層：暗褐色粘質土（耕作土・表土）層厚40㎝

Ⅰ-②層：黒褐色粘質土（遺物包含層・遺構埋土）

Ⅱ層：にぶい黄橙色粘土～砂質土（地山）

第3節　遺構（図24、図版14～15）

検出した遺構は、縄文時代晩期の土坑、縄文時代後期後葉から晩期の旧谷地形がある。調査区の幅が0.5～1.0mと狭く、梨の木の植樹による撹乱と湧水により、遺構検出は困難を極めたため、ピット以外は遺構の種別や大きさなど全容が判明しなかった。主な遺構から、縄文土器が出土している。

1　旧谷地形ＳＸ01

調査区北西で検出した。南東から北西に向かって流れる旧谷地形である。調査区外へ広がるため、遺構全体の形は不明である。検出長1.0m、検出幅15.0m、深さ1.25mである。平面形は不明、断面形は部分的な凹凸があるが、全体は舟底形である。遺構埋土は2層である。上層は黒色粘質土に炭化物等を含み、下層は黒褐色砂質土に地山の土が縞状に混じり、締り良である。上・下層とも縄文時代晩期の遺物が出土した。遺物の出土する高さは一定ではなく、縄文時代晩期を通じて堆積したと考えられる。

2　土坑

ＳＫ03　調査区北側中央で検出した。検出長2.5m、検出幅1.0m、深さ1.0mである。平面形は不明、断面形は部分的な凹凸があるが、全体はU字形である。

ＳＫ05　調査区北側中央で検出した。検出長10.0m、検出幅0.5m、深さ1.0mである。平面形は不明、断面形は部分的な凹凸があるが、全体はU字形である。溝状遺構の可能性がある

ＳＫ15・16　調査区南東で検出した。検出長 11.5m、検出幅 0.5m、深さ 1.0mである。平面形は不明、断面形は部分的な凹凸があるが、全体に緩いU字形である。ＳＫ05と同様の溝状遺構の可能性がある。

第４節　遺物（図版 16）

今回の調査では、縄文土器・石器、須恵器がコンテナボックス（60cm×40cm×10cm）に換算して 15 箱出土した。洗浄作業が完了していないため、現時点で判明している遺物の概要を記載する。

1　縄文土器・土製品

縄文時代晩期前葉～中葉を主体とし、出土遺物の大半を占める。調査区全域から出土するが、北西の旧谷地形ＳＸ01からの出土量が多い。玉抱き三叉文を施した御経塚期、羊歯状文・入組文を施した中屋期が大半を占め、指頭沈線文を施した下野期のもの、口縁部に一字状三叉文を施した浅鉢など後期後葉～末と見られる土器も出土した。

土製品には、イノシシ形獣面突起、土偶の腕・足部分がある。イノシシ形獣面突起は、イノシシの顔を左斜め前から見た状況を模す。丸い突起に針状の工具で２点刺突し、鼻を表現する。土偶の腕は肩から手先、足部分はくるぶしから先の部分にあたる。

2　石器

石刀、打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石、敲石、剥片などがある。完形品は皆無である。土器の出土量を考慮すると少ない。石刀の石材は緑泥片岩である。このほか、被熱のある礫が多く出土した。石組炉に利用された石材の可能性がある。

3　その他

須恵器が表土からわずかに出土している。本遺跡は須恵器窯跡の存在も予想されており、近隣から流れ込んだと考えられる。

第４章　総括

調査区全域から、縄文時代晩期を主体とする遺構を検出した。調査区北西で検出した旧谷地形は深さ約 1.25mで、今回検出した部分が水源と考えられ、現在も湧水が激しい。ここから遺物が大量に出土した。遺物には、土偶や石刀など祭祀関係の遺物があり全て破損している。このことから、出土した遺物は、周辺に広がる集落で祭祀を行った後廃され、旧谷地形に廃棄したものと推定される。（細辻）

＜引用・参考文献＞

小矢部市教育委員会 2007『富山県小矢部市　桜町遺跡発掘調査報告書　縄文時代編』小矢部市教育委員会

酒井重洋 2007「3　桜町遺跡の縄文後期末から晩期の土器変遷について」『富山県小矢部市　桜町遺跡発掘調査報告書　縄文時代総括編』183-206 頁　小矢部市教育委員会

酒井重洋 2008「中屋式土器」『総覧縄文土器』762-767 頁　㈱アム・プロモーション

酒井重洋 2008「下野式土器」『総覧縄文土器』768-773 頁　㈱アム・プロモーション

富山市教育委員会 1987「13　吉作遺跡」『富山市埋蔵文化財調査概要』4,10-11 頁

富山市教育委員会 1998『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会・現地事業団富山建設事務所 2003『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 133

西野秀和 2008「御経塚式土器」『総覧縄文土器』756-761 頁　㈱アム・プロモーション

文化庁文化財部記念物課 2010『発掘調査のてびき』

堀沢祐一 2004「北陸地域の動物意匠について」『考古学ジャーナル』№515　ニューサイエンス社

南久和 2001『編年　―その方法と実際―』南書会

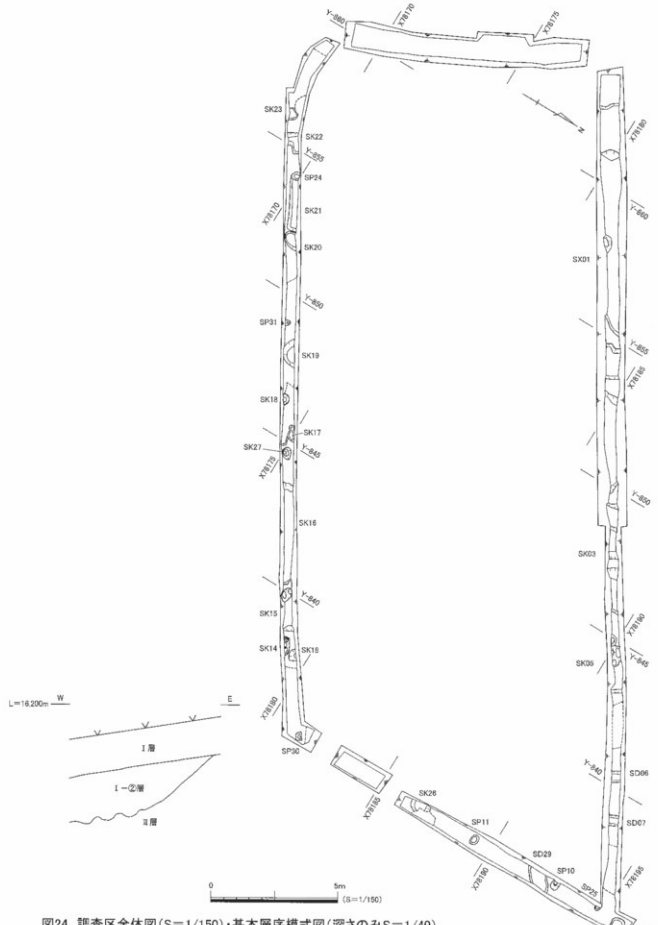
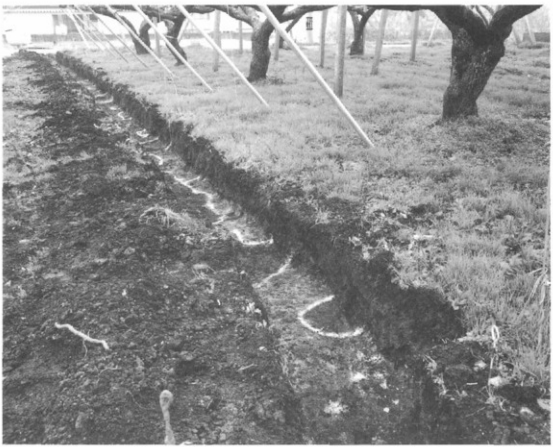


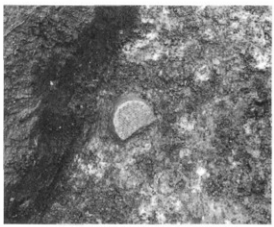
図24　調査区全体図(S＝1/150)・基本層序模式図(深さのみS＝1/40)



調査区南側遺構検出（西から）

調査区南側完掘（西から）

SK03遺物出土状況（北西から）



SX01中部遺物出土状況（南西から）

SX01西部遺物出土状況（北西から）

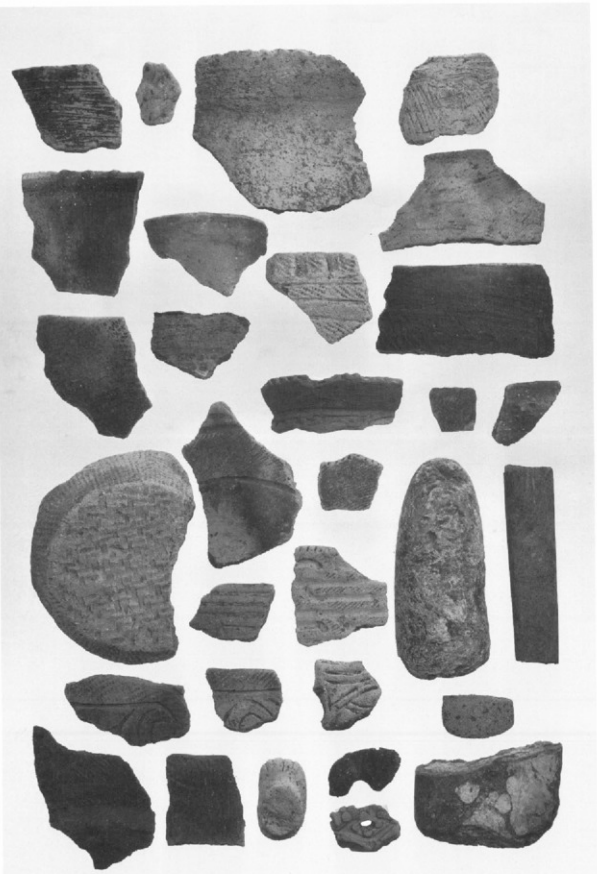
SX01東部遺物出土状況（南西から）

SK03・SK05完掘（東から）

SX01完掘（東から）

調査区西側完掘（北から）

調査区東側完掘（南から）



出土遺物写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	とやましないいせきはっくつちょうさがいよう　じゅういち
書名	富山市内遺跡発掘調査概要　XI
副書名	北代村巻V遺跡　友坂遺跡　吉作遺跡
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	61
編著者名	細辻嘉門・野垣好史・三上智丈
編集機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
編集機関所在所	〒930-0091　富山市愛宕町1丁目2-24　℡. 076-442-4246
発行年月日	2014（平成26）年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
北代村巻V遺跡（きたがいむらまきご）	富山市北代（きただい）地内	16201	2010198	36°43′10″	137°10′53″	20130725～20130827	122	個人住宅建築
友坂遺跡（ともさかいせき）	富山市婦中町（ふちゅうまち）下条地内（げじょう）	16201	2010429	36°40′32″	137°08′59″	20130809～20130917	52.31	
吉作遺跡（よしづくりいせき）	富山市生吉（すぎよし）地内	16201	2010111	36°42′17″	137°09′26″	20131205～20131227	65.82	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北代村巻V遺跡	集落	縄文中期		縄文土器	鎌倉時代の区画溝を検出した。
		平安	土坑	土師器・須恵器・土錘・鉄滓	
		鎌倉	溝・土坑・ピット	中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・越前・青磁	
友坂遺跡	集落	平安	井戸	土師器・須恵器	古代～中世の集落を検出した。
		鎌倉～戦国	井戸・溝・土坑・ピット	中世土師器・珠洲・青磁 土錘	
吉作遺跡	集落・窯	縄文晩期	土坑・谷地形	縄文土器・土偶・石刀・磨製石斧・打製石斧・剥片	縄文時代晩期の土坑・谷地形を検出した。
		奈良・平安		須恵器	

要約

北代村巻V遺跡　鎌倉時代を主体とし、縦横に直交する区画溝を検出した。平成20年度に行った東側隣接地の調査でも同様の区画溝を検出しており、両調査区の成果から東西約22mの区画を形成していたと推測できる。溝は調査区外へも延びていることから、別の区画がさらに存在し、複数の区画で構成された集落と推定される。縄文時代中期、平安時代の遺物も多く出土し、当該地周辺に集落が存在したとみられる。

友坂遺跡　平安から戦国にかけての遺構を検出した。斜掘り井戸を2基確認し、出土遺物では青磁が多く出土しており、輸入陶磁器を入手できる階層の集落の縁辺部であると考えられる。今回調査区の300m北で過去に調査した館や、近隣にある安田城跡、金屋南遺跡との関連が伺える集落である

吉作遺跡　調査区全域で縄文時代晩期の遺構を検出した。調査区北西にある旧谷地形は、調査区付近が水源とみられ、土偶や石刀、赤彩された土器など、祭祀関係の遺物が出土した。旧谷地形から出土した遺物は、周辺で祭祀が行われた後、縄文時代晩期を通して廃棄された遺物と推定される。また、被熱を受けた礫が多量に見られることから、竪穴建物の炉石と考えられ、周辺に集落が広がる可能性が高い。

富山市埋蔵文化財調査報告61

富山市内遺跡発掘調査概要XI

—北代村巻V遺跡　友坂遺跡　吉作遺跡　—

発行日：2014（平成26）年3月31日
発　行：富山市教育委員会
編　集：富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町1丁目2番24号
ＴＥＬ：076-442-4246
ＦＡＸ：076-442-5810
E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷：前田印刷株式会社